

2010年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2010年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2011年10月

はじめに

総長 吉岡 知哉

2004年度に開始された本学の「学生による授業評価アンケート」も7年を経て、報告書もこれで7冊目になります。

本学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして 4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。7年間の授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートは、基本的に「一教員一科目」という方針で始まりました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FDと略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学のFD推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあって、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かのを読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

目次

はじめに	
1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	23
4-3 理学部	26
4-4 社会学部	29
4-5 法学部	31
4-6 経営学部	33
4-7 異文化コミュニケーション学部	36
4-8 観光学部	39
4-9 コミュニティ福祉学部	41
4-10 現代心理学部	43
4-11 全学共通カリキュラム	45
4-12 学校・社会教育講座	50
5. 2010年度のまとめと今後の展望	53
6. 集計データ（資料編）	55
6-1 回答者数・回答率	55
6-2 全学集計	56
6-3 学部等別平均値	59
6-4 「グループ集計」科目一覧	71

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1-1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.6参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公

開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

2010年度は、定められた基本方針に拠って実施する初年度となり、上記の②「1 教員 1 科目」の原則により実施した。各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針」（p.11）を参照されたい。

2010年度前期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 開講曜日 火 担当者 立教 太郎 履修者数 60
 科目名 授業評価01 開講時間 3 教室 1111 回数 56

単科集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答, エラー)

5	4	3	2	1	無回答	エラー
0	0	0	0	0	0	0

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして所属的な勉強をした
- 5) シラバス (履修要項の履修内容) は受講に役立つ
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な学習性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像授業教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現れに通じる普遍的な意味

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学習的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

授業評価に対する担当教員の所見

記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

アンケートの質問紙は、5 段階による評価方式の設問を 23 設問、記述による評価欄を 2 箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2010 年度は、文学部（2 設問）、経済学部（6 設問）、理学部（3 設問）、観光学部（7 設問）、現代心理学部（4 設問）、全学共通カリキュラム（3 設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

2010年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 (1) (2) (3) (4)
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	本学学部生以外 (50)
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	<small>(注意)</small> 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。 4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。 6. 折りまげたり汚したりしないこと。
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	(5) (4) (3) (2) (1)
2) この授業に積極的に参加した	(5) (4) (3) (2) (1)
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	(5) (4) (3) (2) (1)
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	(5) (4) (3) (2) (1)
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	(5) (4) (3) (2) (1)
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 各回の授業内容の量が適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 各回の授業のねらいは明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 各回の授業内容は明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
5) 十分な静粛性が保たれた	(5) (4) (3) (2) (1)
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
7) 板書のしかたが適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	(5) (4) (3) (2) (1)
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 自分で調べ、考える姿勢	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	(5) (4) (3) (2) (1)
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業全体の目標が明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 学問的興味をかきたてられた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) この授業を受けて満足した	(5) (4) (3) (2) (1)

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

(文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

(経済学部)

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール2) 英語で経済文献を読む力が増した
- 3) (基礎ゼミナール2) レジューメやレポート作成の際に英語文献にまで視野が広がった
- 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった
- 5) (情報処理系科目※) Power Point ファイルの作成ができるようになった
- 6) (情報処理系科目※) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できるようになった

※情報処理系科目とは、情報処理入門・情報処理入門2をさす

(理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 2) (1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 3) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

(観光学部)

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ(観光学部以外の学生は答えないこと)
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う
- 3) わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している
- 4) わたしは、旅行することが好きだ
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

(現代心理学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

(全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2010年度は、3年に一度の「1教員1科目」の原則で実施する年度であった。

しかし、各学部等において、「1教員1科目」に加え、学部等の必要性に応じた科目も対象としたいとの要望が寄せられたので、それらも実施対象とした。

各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文 学 部	1教員1講義科目を基本とし、そこに含まれない教員は複数担当科目も対象とする また、経年変化を見るために、一部の初年次科目も対象とする
経 済 学 部	(1) 1教員1科目を原則に主要担当科目の前期科目で実施するが、必修科目も重複担当する場合は複数科目で実施する (2) 必修・選択必修科目及び「基礎ゼミナール2(後期)」「情報処理入門(前期)」「**演習」「**情報処理」は全科目・全クラス実施する (3) 他学部設置科目は原則として実施しない。ただし一部他学部等所属教員が担当する科目については実施する
理 学 部	教員1科目毎を基本とする 物理学科は、実験等の特別な科目を除いて、全科目でアンケートを実施する
社 会 学 部	(1) 必修科目、選択必修科目は原則としてすべて実施する (2) 講義科目1教員1科目となるように選定作業を行う (3) 産業関係学科の科目は実施しない
法 学 部	(1) 入門科目を選定し、その後「講義科目1教員1科目」を原則として選定する (2) 演習系科目は対象としない
経 営 学 部	「演習」を除く全科目で実施する
異文化コミュニケーション学部	1教員1科目とする 1年次必修および複数コマ展開必修科目についてはすべての科目を対象とする
観 光 学 部	(1) ひとりの教員に1科目以上を対象とする (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする (3) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (4) 複数教員担当科目は対象としない (5) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 1教員1科目 (2) 複数教員担当科目は除く (3) 「社会福祉士」国家試験資格科目・「社会調査士」資格科目・2010年度新規開講科目を優先する (4) 専任教員担当科目は、2009年度と異なる科目を優先する (5) 演習科目は、対象外とする
現 代 心 理 学 部	(1) 教員1科目を原則とする (2) 複数教員担当科目のうち、初年次教育科目、必修科目及び基幹科目の一部は実施対象とする
全学共通カリキュラム	全カリ総合Aのうち、講義系科目を担当する教員1名につき1科目の実施とする
学校・社会教育講座	1教員1科目の実施とする ただし、内容が演習のもの、履修者数10名未満の科目は除外する

2-4 実施科目数

実施予定科目数、実施科目数、所見票の提出数を、アンケートの実施学期別に下の表にまとめた。全学の実施率は 98.6% (1,460/1,480)、所見票提出率は 78.8% (1,151/1,460)であった。

通年科目で前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期 1 科目および後期 1 科目としてカウントした。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	159	86	73	154	84	70	128	67	61
経 済 学 部	166	94	72	164	93	71	143	85	58
理 学 部	109	54	55	109	54	55	97	46	51
社 会 学 部	140	72	68	137	72	65	105	55	50
法 学 部	65	26	39	65	26	39	57	23	34
経 営 学 部	169	90	79	166	90	76	94	53	41
異文化コミュニケーション学部	76	50	26	74	48	26	61	39	22
観 光 学 部	104	67	37	103	67	36	75	49	26
コミュニティ福祉学部	108	62	46	108	62	46	87	48	39
現 代 心 理 学 部	95	45	50	94	44	50	65	30	35
全学共通カリキュラム	231	116	115	229	115	114	186	92	94
学校・社会教育講座	58	35	23	57	35	22	53	32	21
合 計	1,480	797	683	1,460	790	670	1,151	619	532

2-5 実施期間

実施は、①授業が進行した後半の時期が好ましい、②試験の時期は避けることから、下記の期間とした。下記期間内に実施できない場合は翌週に実施した。

前期 : 2010年6月25日(金)から7月1日(木)

後期 : 2010年12月6日(月)から12月11日(土)

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	8,452	5,909	6,369	3,791	14,821	9,700
経 済 学 部	14,519	7,073	6,447	2,871	20,966	9,944
理 学 部	4,134	2,661	3,534	2,091	7,668	4,752
社 会 学 部	9,699	5,571	9,421	4,703	19,120	10,274
法 学 部	8,260	3,320	10,224	3,313	18,484	6,633
経 営 学 部	8,553	4,981	7,310	4,018	15,863	8,999
異文化コミュニケーション学部	1,675	1,405	769	625	2,444	2,030
観 光 学 部	7,845	4,816	4,211	2,713	12,056	7,529
コミュニティ福祉学部	5,844	3,606	5,551	3,332	11,395	6,938
現 代 心 理 学 部	4,315	2,845	4,539	2,648	8,854	5,493
全学共通カリキュラム	22,110	12,716	18,666	9,847	40,776	22,563
学校・社会教育講座	2,774	2,174	1,291	958	4,065	3,132
合 計	98,180	57,077	78,332	40,910	176,512	97,987

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、「所見集」としてまとめ、イントラネット上および下記の図書館において学内者の閲覧に供している。

池袋本館および新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム

社会科学系図書館：経済・社会・法・経営・異文化コミュニケーション学部、
全学共通カリキュラム

自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

アンケート実施後1~2ヶ月に下記の集計結果をWEB上に掲載し、所見の執筆を依頼した。

- ①集計結果票 (p.16 参照)
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

3-2 学部等

1) 集計の方針

本年度の科目選定方針は、「1 教員 1 科目」であり、原則として、「全学・学部・学科などにより集計し、学部間比較等を行う。グループ集計は原則として実施しない」こととなっていた。

しかし、実際には、学部等がある程度のテーマ性を持って実施科目を選定し、学部等ごとに科目選定方針が異なったため、以下の通り集計方針を修正した。

- ① 全学・学部・学科などにより集計する。学部間比較、昨年度との比較は行わない。
- ② グループ集計を実施する。グループ集計の実施有無は学部等の判断に任せる。

2) 集計内容

① 回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、回答率を算出した (資料編 p.55 参照)。

② 設問項目別平均値

設問項目別平均値を、全学、学部等別、学科等別に算出した。学部等平均値については、5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、授業規模別平均値、学年別平均値を全学、学部等別に算出した (学部等別平均値は、資料編 pp.59-70 参照)。

③ 設問項目間の相関係数

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

④ グループ集計

学部等が独自に設定した基準によりアンケート実施科目をグループ化し、設問ごとに5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した (pp.17-18 参照)。

2010年度前期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	火	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	3	教室	1111	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー	
回答者数、()内はパーセント							平均
							1から5の数字の平均

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.54
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	2.00

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00
5) 十分な静肅性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05
7) 板書のしかたが適切だった	8 (15%)	18 (33%)	21 (38%)	5 (9%)	3 (5%)	1	0	3.42
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	6 (11%)	5 (9%)	30 (55%)	5 (9%)	9 (16%)	1	0	2.89
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

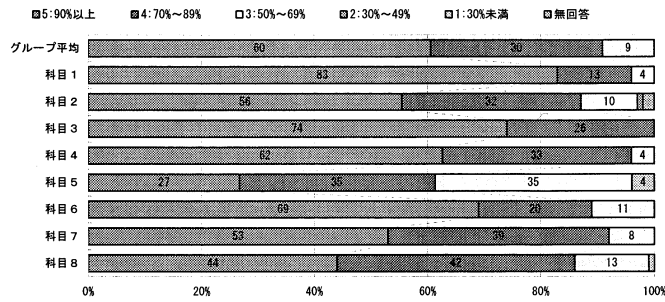
1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14

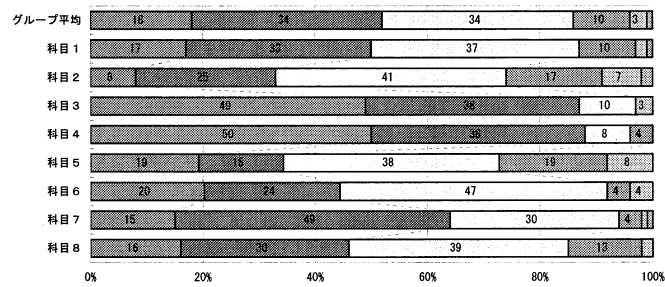
設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 無回答)

I-1 授業全体を通じての出席率



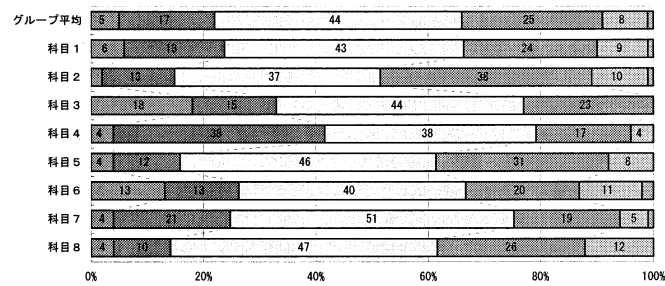
	回答者数	平均
グループ平均	621	4.5
科目1	127	4.8
科目2	104	4.5
科目3	39	4.7
科目4	24	4.6
科目5	26	3.8
科目6	45	4.6
科目7	150	4.5
科目8	106	4.3

I-2 この授業に積極的に参加した



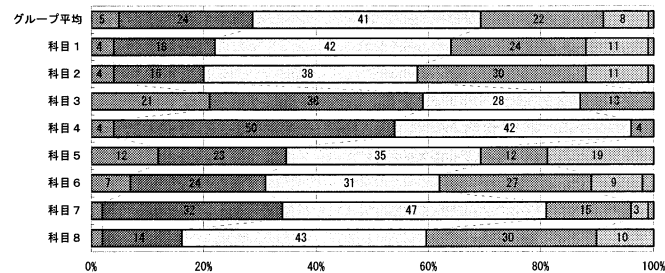
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.6
科目1	127	3.5
科目2	104	3.1
科目3	39	4.3
科目4	24	4.3
科目5	26	3.2
科目6	45	3.5
科目7	150	3.8
科目8	106	3.5

I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



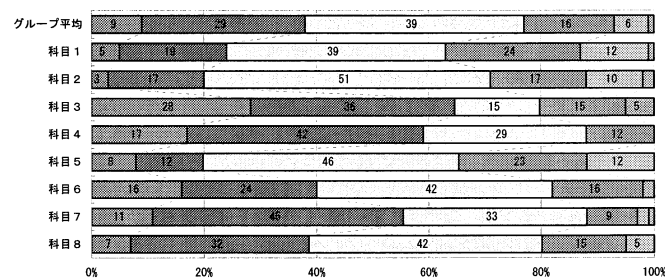
	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.9
科目2	104	2.6
科目3	39	3.3
科目4	24	3.2
科目5	26	2.7
科目6	45	3.0
科目7	150	3.0
科目8	106	2.7

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.8
科目2	104	2.7
科目3	39	3.7
科目4	24	3.5
科目5	26	3.0
科目6	45	2.9
科目7	150	3.1
科目8	106	2.7

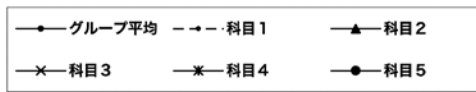
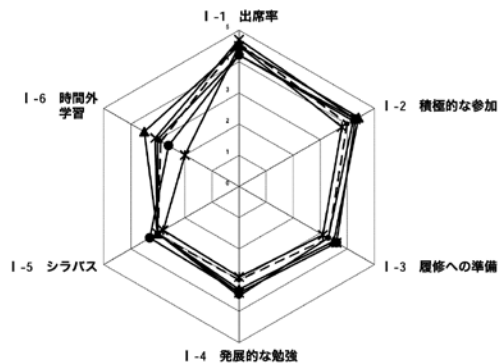
I-5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った



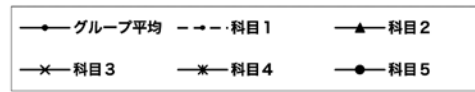
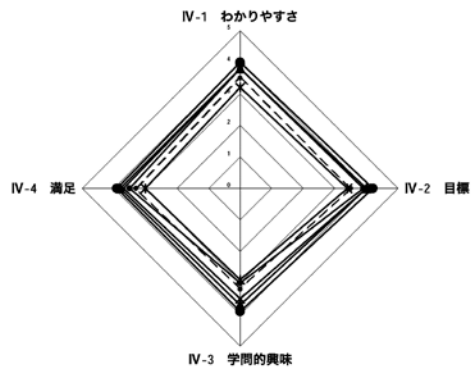
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.2
科目1	127	2.8
科目2	104	2.9
科目3	39	3.8
科目4	24	3.6
科目5	26	2.8
科目6	45	3.4
科目7	150	3.5
科目8	106	3.2

平均値のレーダーチャート

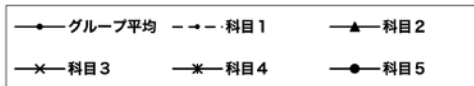
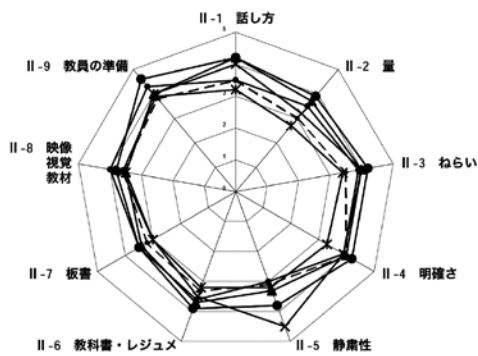
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



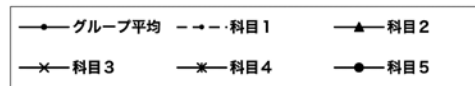
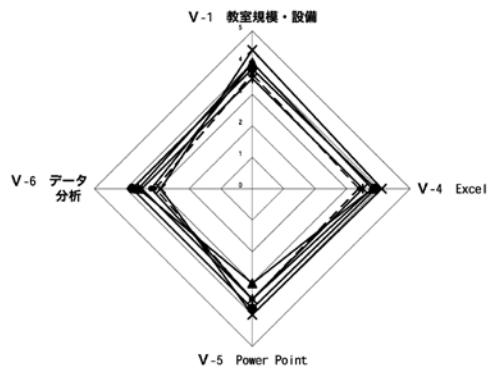
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



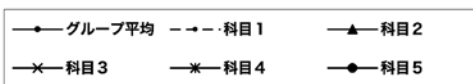
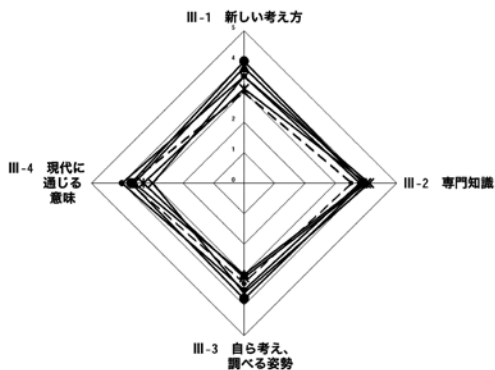
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



V. 学部等による設問 (経済 情報処理系科目)



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いに思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

< I -1 >

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

< I -6 >

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2010年度は、3年に1度の全学的原則「1教員1科目」に則って対象科目を選定した。そこに含まれない教員に対しては複数担当科目も対象とし、さらに経年変化を見るために、一部初年次科目も対象とした。具体的な科目種別は以下である。

- (1) 講義科目
- (2) 一部の演習科目
 - ① 1年次必修科目
 - ② 2年次必修科目
 - ③ 例外として、(1) および (2) の①②をいずれも担当しない教員についての演習科目

なお、設問項目は統一とし、基本的に前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

合計154の授業についてアンケートが実施された。調査対象授業の総履修者数は14,821名であり、そのうち9,700名が調査に回答した。回答率は65.45%である。これは全学平均回答率の55.51%よりも高い。アンケートに回答した学生の学年を調べると1年次953名、2年次3,301名、3年次3,737名、4年次1,531名、不明178名となる。これは、2010年度の科目選定方針が、講義科目に特段の重点を置いていたことを反映した結果である。だが同時に、1年次生の回答も約1,000名にのぼった結果から、文学部が例年重視してきた「初年次教育」の成果を知るという目的が、2010年度のアンケートにおいても部分的に達成されたことが明らかとなった。

全体の各設問項目に対する回答者の平均値を見ると、I「授業への取り組み方」について、特に顕著な問題点が示唆されている。平均4.59、標準偏差0.63を示すI1「出席率」は、学生が総じて出席率への高い意識を持ち、受講者間のばらつきもないことを示している。つまり多くの学生が、「自分は授業にほとんど出席していた」と考えていたということである。しかし同時に、I2「授業への積極的な参加」では3.86と、平均値は一気に0.73ポイントも下落する。同じくI3「授業の履修にあたっての準備状況」における3.14（同一1.45ポイント）、I4「授業をきっかけにした発展的勉強」についての3.13（同一1.46ポイント）という平均値から総合的に判断すると、授業を自主的な学修に結びつけている受講者は比較的少なく、とりあえず「勤勉に」授業へ出席さえしていれば事足りると考える学生の一般的性格が現れてくる。

この傾向はまた、I6「授業時間以外に学習した時間」とも相関関係にある。最頻値は「0時間」であり「1時間未満」がそれに続く。両者を合わせると70%以上の学生が授業に係わる学習を1時間程度すらしていないということになる。この傾向もある程度、2010年度の統計対象が、予習および双方向運用に基づく演習科目ではなく、むしろ各回の授業の実地において新たな知識に触れ、思考する機会を与える講義科目を主としていたことに起因すると考えられる。しかし、自宅学習時間の少なさは、各学科専修別（1.84～2.38ポイント）にも文学部基幹科目（1.96ポイント）にも共通してみられる特徴であるとともに、授業規模にも大差なく観察された（50名以下では2.23ポイント、51名～100名、101名～

150名、151名以上のクラスではいずれも1.99ポイント)。それは学年別に見ても同じであった。平均学習時間が最も高いのは1年次生で2.16ポイント、それに2年次生の2.09ポイント、3年次生の1.97ポイントが続き、4年次生の1.95ポイントが最も低かった。前年度に目立った学年進行に伴う学習時間の漸次減少が、今年度も改善されずにみられるところとなった。

Ⅱの「授業の進め方」を検証すると、前年度と同じくⅡ9「教員の授業準備の周到さ」についての平均値が4.25と高い。ここから受講者は、教員の授業準備に対しては高い評価を与えていることがわかる。それに関連し、Ⅲ「授業から得たもの」という項目中、平均点4に達することはなかったものの、Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」およびⅢ2「基本的な専門知識」を修得できたとする平均値が、比較的高い3.92、3.91となっている。だが同時に、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」については同項目中最低の3.37に留まった。このことは先の自主学習時間の少なさと連動し、いわゆる「よい授業」も、学生の学習態度を変えるには至っていない様子を示している。こうした傾向に鑑みれば、Ⅳ1「授業のわかりやすさ」、Ⅳ2「授業目的の明確さ」、Ⅳ3「学問的興味の触発」、Ⅳ4「授業満足度」について、4年次生のみがおおむね4ポイント以上の平均値を出している理由が推測できる。これらの数値は、おそらく受講者の学業面での成熟度と関連しているということである。

なお、文学部による設問に関しては、教室の大きさも受講者数もほぼ適切だったという回答が得られている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

学生からの評価結果については、ほとんどの教員が妥当なものと認め、かつ各自があらかじめ意図した内容に対する授業満足度が得られていると感じているようであった。このことは、本アンケートで蓄積された統計結果が、授業の組み立てや改善に役立っていることを示唆している。いっぽうで、静肅性ならびに、レポートの字数・ノートテイク・板書の量といった事柄を中心に（いずれもそれらが「多過ぎる」という学生側の否定的コメントが散見される）、学生と教員の意識がすれ違っている例が確認される。こうした問題点は、前述した「自宅学習の不足」傾向との因果関係のもとに生じる、より構造的なものであると考えられる。

4. 今後の改善に向けて

2010年度は、前年に引き続き、本学部学生の学業への意識や取り組みの傾向を全体的に検証した。その結果、前年度に引き続き、履修者は授業にはよく出席するが、授業外での学習時間は非常に少ないことがわかった。すべての学科専修に横断的にみられるこの傾向を裏付けるように、ほとんどの教員のコメントには、学生により熱心に勉強させることができるような授業へ向けた改善点が、積極的に提案されていた。大学における授業は既存の学力では対応できない理解と思考を履修者に求め、それにより、かれらの知的成長を促す側面がある。本調査結果では、そのための努力が教員のみならず履修者側にも必要であるという事実、さらには学生を自主学習に、より明確に動機づけていく方法を見出すことが、授業の構成やテクニカルな教授法への留意に勝るとも劣らず重要であることが、確認されたといえるであろう。

今年度も顕著に表れたくだんの傾向は、例えば「自分は文学部で何を学んだか」をうまく説明できないために、就職活動時に「苦戦」する者が多いといわれている本学部学生の大局的課題をも照らしているように感じられる。「大学で何を学んだか」という問いに対する答えは決してマニュアル的に教わるものではなく、各自が努力や実践のなかから見出すべきものに違いない。しかし、自主的な学問への取り組みや自宅学習の少なさが、「文学部講義科目の履修に際し、何を勉強すればよいかわからない」、あるいはそれに対する「関連学習が何であるのかがまずわからない」ということを表しているのだとすれば、それは、卒業を前にした学生が直面する苦境の潜在的徴候であるとも考えられる。そのような側面も意識しつつ、さらにこの傾向の検証を続けていかねばならないだろう。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2010年度は以下の方針で科目を選定した。

- (1) 1 教員 1 科目を原則に主要担当科目の前期科目で実施するが、必修科目も重複担当する場合は複数科目で実施する。
- (2) 必修・選択必修科目および「基礎ゼミナール2（後期）」、「情報処理入門（前期）」、「**情報処理」、「**演習」は全科目・全クラス実施する。
- (3) 他学部設置科目は原則として実施しない。ただし、一部他学部等所属教員が担当する科目については実施する。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

164 の授業においてアンケートが実施された。調査対象授業の総履修者数は 20,966 名であり、その内 9,944 名が調査に回答した。回答率は 47.43% で、調査全体の平均値 (55.51%) を下回っている。アンケートに回答した学生を学年別にみると、1 年生が 2,930 名、2 年生が 2,438 名、3 年生が 2,686 名、4 年生が 1,686 名、不明が 206 名となっている。学年毎のばらつきが大きくないため、学部全体の動向を知る上でも有用な資料だといえる。

I 「授業への取り組みについて」

各設問に対する回答者の平均値をみると、1 の「出席率」は 4.46、標準偏差 0.84 であり、授業に出席することへの意識の高さが窺える。他方、6 の「授業時以外に学習した時間」は、2.26 となっている。これは、多くの学生が授業時以外には授業に関わる学習をしていないことを意味している（1 時間未満（0 時間を含む）が 6 割ほどを占めている）。もっとも、この点については調査全体の平均値は 2.10 となっているので、全学的な傾向だともいえる。

II 「授業の進め方」

このカテゴリーは、すべてのアンケート項目（全 9 項目）において、調査全体の平均を下回っている。特に、8 の「映像視覚教材の使用」の 3.45（調査全体；3.77）、9 の「教員の授業準備」の 3.98（同；4.15）が目を惹く。前者については、科目の性格等によって映像視覚教材の必要性の有無も異なるため一概に当該教材の使用を促すことはできないが、検討の余地は残るであろう。また、後者については、他の項目（「聞きやすい話し方」、「授業内容の量」、「授業のねらい」）が低かったことが、そのような印象を与えてしまったとも考えられる。現段階では確定的なことは言えないが、今後もしっかりと推移を見ていく必要がある。

III 「この授業から得るものができたこと」

1 の「自分にとって新しい考え方・発想」が 3.57（同；3.83）と低いのが気になるが、2009 年度が 3.50 であったことを勘案すると一定の改善は見られる。他方、3 の「自分で考え、調べる姿勢」は 2009 年度の 3.50 から 3.32（同；3.34）とポイントを下げている。

IV 「総合的な授業評価」

平均値が 4 を超える項目がなく、これは上のⅡ、Ⅲの結果にも関係していると考えられる。最も高いのが 2 の「授業全体の目標が明確であった」の 3.79（同；3.87）であり、最も低いのが 3 の「学問的興味をかきたてられた」の 3.57（同；3.73）である。総じて低いものの 2009 年度と比較するとすべての項目においてポイントが上昇しており改善の傾向は見られる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

情報処理入門（前期）、経営学 1（前期）、基礎ゼミナール 2（後期）についてグループ集計を行った。これらは共通シラバスに基づき複数コマ開講されており、担当者毎のばらつきが低いことが望ましいと考えられる。

3-2 情報処理入門

大半の設問項目で平均値は 3.5 を超えており、4.0 以上の項目も六つある（「出席率」「授業への積極的な参加」「各回の授業内容の明確さ」「教員の授業準備」「授業目標の明確さ」「教室の規模と設備」）。担当者別の数値も近似しており、クラスによる極端な差異は見出すことができない。よって、2009 年度同様、授業内容と教育効果は科目全体を通じて平準的に達成できていると考えられる。学部等による設問も総じて高いポイントを示している。

3-3 経営学 1

二科目で一つのグループを形成したため担当教員による数値の違いが目立つ結果となったが、他のグループと比べても極端に低いものはみられない。

3-4 基礎ゼミナール 2

情報処理入門同様、大半の項目で平均値は 3.5 を超えており、4.0 以上の項目もグループによっては 12 項目に及ぶ。共通テキストの利用や、担当者間での授業情報の共有化（年度初めに実施する基礎ゼミナール担当者会議等）が効果を発揮したものと考えられる。今後は、科目に固有の設問（V2、3）を如何に上昇させるかが課題である。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

板書のしかた、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）等について改善を求める意見が多く、ほとんどの教員が学生からの指摘を真摯に受けとめ、次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。学生からの要望（出席の取り方、レジュメ配布の方法）についても可能な限り対応しようと試みている。

他方、相反する意見が出され（例；講義がわかりやすいという意見がある一方で、難しすぎるという意見もあり）、返答に苦勞している様子も窺える。

5. 今後の改善にむけて

グループ集計の科目群については、数年来取り組んできた科目共通テキストの作成・利

用、担当者間での授業情報の共有化が功を奏し、クラス毎のばらつきが大幅に改善された。今後もこの方針を踏襲し、さらなる改善に役立てていきたい。他方、2の「集計データにみられる結果のまとめ」でも触れたが、学部としては、ほとんどの項目で全体の平均値を下回る結果となった。これについては原因を明らかにして、何らかの対策を講じなければならない。今後の課題だといえよう。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2010年度は、全学の基準にそって教員1科目毎を基本とした。ただし、物理学科は、例年実験等の特別な科目を除いて全科目でアンケートを実施しているので、2010年度も経過追跡が可能なように全科目でアンケートを実施した。また、理学部独自の設問項目として「教員は質問・疑問に対して積極的に答えてくれた」という設問（V1）に加えて、2009年度から、高校授業からのギャップに戸惑う学生の意識を間接的に探るために「(1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた」という設問（V2）と、学生の自習意欲を図る狙いで「(必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった」という設問（V3）を継続した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率 61.97%で他学部と比べて平均的である。学年別の回答数は2年生、3年生が1,363、1,333名に対し、1年生は1,621名と多くなっている。

理学部の設問項目別平均値は全学と比べて特徴的にポイントの高いものは無い。出席率（I1）、授業時間以外に学習した時間（I6）、授業をきっかけに発展的な勉強をした（I4）、自分で調べ、考える姿勢を得ることができた（III3）という項目がわずかに高い。

一方、シラバスが受講に役立った（I5）、映像視覚教材の使用が効果的であった（II8）が低い。これは、理学部の授業の形態上、やむをえないと思われる。また、わかりやすい授業だった（IV1）、聞きやすい話し方だった（II1）、内容の量が適切だった（II2）、授業内容は明確だった（II4）のポイントが低い。これらから、学生が授業についていくことに苦心していることが分かる。

学科別にみると、授業時間外学習（I6）、授業への積極的な参加（I2）で数学科のポイントが高い。また、授業の進め方の（II1～II4）でも数学科のポイントが高く、物理学科のポイントが低い。同じく（IV1～IV4）の授業に対する総合的な評価でも物理学科が低い。教員が質問・疑問に対し積極的に答えてくれたという項目（V1）では物理学科、化学科が低く、生命理学科、数学科が高い。学生同士の共同の勉強（V3）は数学科で非常にうまく行われているようである。学年別では、出席率（I1）、授業参加への積極さ（I2）が学年経過に従い徐々に低下しているものの2年生、3年生が1年生に比べておおむね高いポイントを示している。

なお、グループ集計は行っていない。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

理学部のポイントは他学部と比べると総じて低いが、多くの科目、多くの項目で3.0を超えており、どちらかといえば肯定的な結果と見える場合が多い。そのため、担当教員の所見では、比較的良好であったという記述が多かった。アンケートの結果をどう見るか、専門家による指針がほしい。

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

内容が難しかったのかもしれないという事と、量が多すぎたのかもしれないという所見と共に、学生の、予習復習等の時間外学習が少なすぎるという所見が圧倒的に多い。また、学生の学力に大きな広がりがあり授業運営が難しいことも書かれている。授業への出席率が高いが、授業への積極的な参加が少ない。但し、数学科は演習等で授業への参加意識が高いようだ。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

資料の配布が好評であるので、さらに工夫したいという記述が多い。また、資料をCHORUS等にUPしてほしいという要望があるが、著作権等の問題ですぐにはできないという記述が幾つかあった。内容が難しすぎる、多すぎるという学生のコメントに対し、大学での学習として当然の量と内容なので、授業外時間学習を多くしてついてきてほしいという意見が多い。発展的内容を授業に盛り込んだが、内容が多すぎるという学生の意見に、教員が苦慮している事もよくわかる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

内容が難しすぎる、多すぎるという学生のコメントに対して、多くの教員は、内容を易しくしたり、減らすのではなく、学生に授業外学習をもっと行わせるように工夫したいとしている。そのために、課題を出して授業への関心を高めたり、レジュメの工夫が提案されている。一方で、内容の厳選と授業方法の改善にも言及されている。

パワーポイントと板書の仕方の問題はいろいろ工夫の余地があるようで、幾つかの改善を言及している教員が複数いた。マイクの使用、板書の工夫に関する学生からのコメントに対して、改善努力に言及している。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

レジュメや資料を使うことに対して、非常によい評価が得られている。CHORUSの使用も評判が良いようである。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業の内容が、難しすぎるとか、量が多すぎるとかという意見が非常に多い。また、出席のルールや、レポート提出のルールが厳しいという意見も散見される。板書に対する苦情や声が小さい、聞き取りにくいという意見も少しある。

5. 今後の改善に向けて

内容が難しすぎるとか多すぎるという学生からの意見が大変多い。逆に教員からは、学生の予習、復習不足を指摘する意見が多い。また、出席はするが意欲に欠ける学生が多いことも指摘している。従って、学生の上記意見に対する改善対策は、もちろん、内容の厳選も可能であれば行うべきであるが、むしろ、学生に意欲を持って授業に参加し内容を理解させるような対策が重要であると思われる。学生はレジュメや資料をたいへん高く評価

している。また CHORUS の利用に対する評価も高い。従って、レジュメや資料、CHORUS を活用する事で、意欲を持って授業に参加させる事、もっと授業時間外の勉強に向かわせる事が重要であろう。板書や声の通りにくさ等は、それぞれの教員の改善への努力がなされている事がわかるし、また、今後改善されていくと思われる。

4-4 社会学部

1. 科目選定のねらい

社会学部では、2010年度の授業評価アンケート対象科目の選定方針を、2007年度からの方針を踏襲し以下のように定めた。

- ① 「講義科目1教員、1科目」になるように選定する。
- ② 必修、選択必修の講義科目を原則としてすべて実施する。
- ③ 産業関係学科の科目は実施しない。

①は、現行の授業評価アンケートの主な目的が「各教員が行う授業の仕方や内容の改善」に置かれていることに対応している。その目的を達成するためには、少なくとも各教員が一つの講義科目について授業評価アンケートを実施することが必須である。②は、さらに学部及び学科のカリキュラムを点検するという観点を加味したものである。必修および選択必修科目群は、学部教育カリキュラムの基盤をなす科目と位置づけられ、それらの多くが導入期にあたる初年度、2年次における履修が想定されているので、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育の改善に向けてきわめて重要な意味をもつと考えられる。③は、産業関係学科は2006年度からの学部再編において学生募集を停止しているという理由によるものである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

これまで、大規模授業であるほど満足度や評価が低下する傾向が指摘されてきた。しかし今回の結果をみると、そうした傾向はあまり顕著ではないということがわかった。授業規模別の評価においてきれいな相関がみられるのは、「十分な静肅性が保たれた」「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」「板書のしかたが適切だった」という三つの設問だけであった。しかしその中で強い相関がみられるのは「十分な静肅性がたもたれた」という項目だけで、50名以下では4.28、151名以上では3.16と1ポイント以上の差がついているが、他の二つは0.2ポイントの幅に収まる程度の差しかない。

また今回特徴的なこととしては、51～100名と101～150名のグループでは、(上記3つの設問以外の)ほとんどの設問で、満足度や評価が逆転するという現象が起きていることがある。こうした結果もみても、昨今の傾向として、授業規模と評価とは関連しなくなってきたといえる。

2-2 学年別

授業出席率は、学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼすべての評価においては、学年が進むにつれて上昇している傾向が見られた。とりわけカテゴリーⅡの授業の進め方や、カテゴリーⅣの総合評価では、4ポイント以上の評価が多く、他の学年よりかなり高い。この原因については、1年生は必修科目が多いため履修における自主性が低く、上級生になるにつれてそれが高まることに関連していると思われる。

またカテゴリーⅢの「この授業から得るものができたこと」の各設問での学年別の集計結果も注目に値する。「自分にとって新しい考え方・発想」では、1年生3.71、2年生3.81、

3 年生 3.84、4 年生 4.02、また「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」では 1 年生 3.56、2 年生 3.69、3 年生 3.81、4 年生 4.06 と着実にポイントが上がっており、大学での勉学を通じて、学問のもつ意味・魅力への理解が深まっていることが読み取れる。

2-3 学科別

今回の結果で特徴的なことは、昨年高い評価を受けた現代文化学科が、ほとんどの設問で 3 学科中もっとも低い評価ポイントしか得られなかったことだ。(もっとも高い評価を受けた設問は一つもなかった)。それに対して、メディア社会学科はカテゴリⅠ「授業への取り組み方」、カテゴリⅣ「総合的な満足度」で、社会学科はカテゴリⅢ「この授業から得るものができたこと」で、3 学科中もっとも高い評価を受けた。ただしその差はそれほど大きいものではないことも付け加えておく。

カテゴリⅣの「総合的な満足度」の「わかりやすさ」では、現代文化学科、社会学科がともに 3.76、メディア社会学科は 3.78 であった。また「授業全体の目標の明確さ」では、社会学科 3.83、メディア社会学科 3.80、現代文化学科 3.75、「学問的興味をかき立てられたか」では、メディア社会学科 3.71、社会学科 3.65、現代文化学科 3.64 であった。最後に「この授業を受けて満足したか」の設問では、メディア社会学科が 3.79、社会学科が 3.75、現代文化学科は 3.72 であった。これらの結果からも、全体的には 3 学科の差はさほど大きいものではないことがわかる。また昨年との比較でいえば、満足度は全体的に上がっている。

3. 今後の改善に向けて

今回の結果で注目されるのは、小規模授業ほど満足度や評価が高いという傾向がさほど顕著に現れなかったということだろう。こうした傾向は前回の結果でも指摘されていたが、今回はそれがさらに強まったといえる。逆にいえば、大規模授業（ただし 101～150 人クラス）でも、学生たちの満足度や評価は必ずしも低いとはいえないということである。こうした従来の常識を覆す結果には、学生数の増加に伴って大規模授業が増えたために、教員側がレジュメを作成したり、スライドやパワーポイントなどヴィジュアルに訴える教材を研究したり、さまざまな方法であらかじめ周到に授業の準備を行なった成果が現れていると考えられる。それは、多くの設問で 51～100 人の授業規模のグループと 101～150 人のグループの満足度や評価が逆転していることでも裏付けられるだろう。この規模の授業では小規模授業と同じやり方が取られているのではないか、それに対して、100 人を超えるクラスを担当する教員は、小規模授業と同じやり方ではもはや通用しないことを実感し、大規模授業に相応しい方法を自ら模索して実践しているのではないかと推察されるからだ。しかし、151 人を超えるクラスと小規模授業を比べると、多くの項目でやはり大規模授業の方が評価・満足度は低くなっている。それは、151 人を超えるクラスには 300 人から 500 人超の大規模授業も含まれているため、教員側の対応だけでは限界があるということを示しているといえるだろう。

4-5 法学部

1. 科目選択方針とそのねらい

- 1) 入門科目を選定し、その後「講義科目 1 教員 1 科目」を原則として選定した。
- 2) 演習科目は対象としない。

大人数科目が多い法学部としては、講義科目における教育が容易ではないことを重視している。一方で、演習科目は少人数でアンケート調査が行いにくいという事情がある。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

設問項目別の平均値を見ると、平均値 3 以下の項目が I 4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I 6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」（1 時間未満）であった（III 3「自分で調べ、考える姿勢」のポイントが低いことと関連があるだろう）。I 3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」は、かろうじて 3.00 であった。いずれも学生の授業への取り組みに関するものであり、受動的な学習態度の結果だといえる。大人数授業であることもその理由の一つであろうが、教員としてはそれを前提にさらに工夫が必要であることは従来と変わらない。

授業規模別平均値を見ると、101 名以上になると聞きやすさだけでなく、その他の各項目の平均値も下がっていることが分かる。この傾向は前年までと変わらない。とくに、II 5「十分な静肅性が保たれた」の項目は 50 名以下と比べると 0.5 ポイントほど低いことが目立っており、100 名程度までが静肅性を保つことができる授業であることを示している。

学年別平均値を見ると、学年が上がるごとに平均値が上昇するという傾向がみられることはこれまでと同様である。大学の授業に慣れてきたことであろうが、知識が蓄積されて行くにつれて理解度が深まっている結果だと考えることもできよう。ただ、I 1「授業全体を通じての出席率」で、4 年次生が昨年度よりわずかに上昇しているものの、1 年次生に比べると 0.5 ポイント近く低いことが気にかかる。就職活動による影響だと思われるが、せっかく理解力が深まってきた 4 年次生の時点であるだけに惜しまれる。

設問項目間の相関も興味深い。授業に対する満足度に強い関連性を持つのは、II 3「各回の授業のねらいは明確だった」、II 4「各回の授業内容は明確だった」。そして満足度に直結しているのが IV 1「わかりやすい授業だった」、IV 2「授業全体の目標が明確だった」IV 3「学問的興味をかきたてられた」であった。

従来と同様に、他学部と較べて回答率が極端に低い（35.89、全学平均値は 55.51）ことが目立っている。その背景としては、法学部のカリキュラムに必修科目が無いことや、大教室での授業が多いために出席を取らない（出席率を成績評価にカウントすると、熱意の乏しい学生たちによる私語が多くなるために取って出席を取らないというジレンマもある）、ミニテストもあまり行わないなどの事情がある。とはいえ、学部としてはこのような状態が内包している問題を議論する必要があると思われる。II 5「十分な静肅性が保たれた」の数値が高いことは評価されるべきではあるものの、このように出席率が低いことを考えると、割り引いて考える必要があるだろう。

3. 担当教員からの所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほとんどの教員が評価結果を真摯に受け止め、今後の授業の参考にしたいとしている。授業評価制度に対する積極的な評価が定着していると思われる。

9号館大教室など大人数、大教室の授業においては、教員がさまざまな困難に直面していることがうかがわれる。早急な設備の改善が望まれる。

多くの教員が、予習、復習など学生の主体的積極的な学習態度が不足していることを指摘している。

映像視覚教材の使用については、有効であるという意見と、一方でノートしにくいなど、昨年までと同様に今年も教員の間に戸惑いが見られる。

3-2 「記述による評価欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の批判的評価や要望に対して積極的に改善を約束する回答がほとんどであった。学生の意見は様々であり、相反していることも少なくない。このような意見に対する対応の難しさがうかがえた。マイクを学生に渡す、質問を投げかけるなど、双方向的な授業の効果がいくつか指摘されている。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員が、学生の評価に対応した具体的な改善策を示している。自主的な学習を促すことの難しさは、昨年同様、多くの教員にとって悩みの種である。

マイクやエアコンの調整に戸惑っている例が散見された。一方で、CHORUSなどのシステムの利用が進んでいることがうかがわれた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

授業内容については概ね肯定的であるが、一部には厳しい批判も散見された。学生の評価が集中しているのは、静粛性が保たれているか、授業進捗のテンポが適切か、授業内容が分かりやすいか、声が聞き取りやすいか、板書が丁寧か、などである。

授業や教育に対する教員の熱意や学生に対する思いやりなどについても、学生は敏感に反応している。

また、マイクの調整や教室の冷房が効きすぎて困るという苦情が少なからずあるのも例年通りである。担当部局に改善を求めたい。

5. 今後の授業改善に向けた課題の提示

何よりも学生の主体的な学習態度を生み出すことが求められている。かつては基礎文献講読における議論のなかで身につけたのではないかとと思われるが、現在はどのような科目にこの課題が託されていると言えるだろうか。学部の教育の根本的な課題の一つではないか。

テクニカルな問題や工夫の多くは、大人数教育に起因するものである。大人数教育は私学の宿命ともいえるが、教員はこの問題を改善するために多くの努力を払っているといえる。今後も知恵をしぼることは必要であるが、大学には大教室のインフラの積極的な改善を求めたい。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、例年通り、2～4年次演習を除くすべての科目において実施した。全科目を対象に実施した理由は以下の2点にある。第一に、授業の質を高めるために、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらすと考えているからである。第二に、現在、学部として取り組んでいる国際認証評価のために、全科目を対象とした授業評価アンケート実施が望ましいと考えられるからである。このため、可能であれば、今後も、演習を除く全科目を対象に授業評価アンケートを実施していきたいと考えている。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

授業の総合的評価を示す「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきたてられた」、「この授業を受けて満足した」の4項目については、いずれも3.5点以上となっており、学生から一定の評価を得ているといえよう。とくに50人以下の小規模授業では4項目のうち3項目で4.0点を超える高い評価を得ており、また最も低い「学問的興味をかきたてられた」でも3.99点と高い評価である。ただし、学部として、現状に満足せず、今後、学生からより高い評価を得られるように努力していく必要はある。

授業から得られたものを示す4項目についても、いずれも3.5点以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が最も高く3.9点で、「自分で調べ、考える姿勢」が最も低く3.6点であった。ただし、演習系科目のうち、グループ集計を行った基礎演習、BL1、BL2では、「自分で調べ、考える姿勢」においてそれぞれ4.4点、4.3点、4.2点といずれも4.0点を超えていた。また、規模別に見ても50人以下が4.0点と高い。このことから、比較的規模の大きい、講義系科目において、当該項目の評価が低かったと考えられる。確かに、講義系科目や規模の大きい科目において自ら調べ、考える姿勢を養うのは難しい。大規模で、講義系科目においても、このような姿勢を養成するための工夫が求められる。

授業の進め方についても、「板書のしかたが適切だった」を除いていずれも3.5点以上であり、一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた」については、4.1点という高い評価を得ている。また3.5点未満であった「板書のしかたが適切だった」であっても、3.49点と比較的高い。これらのことから、授業の進め方についても、学生から一定の評価を得ているといえよう。一方で、「十分な静粛性が保たれた」が3.75点と昨年の3.6点よりもあがり、静粛性の点で改善しているように思われる。しかし、標準偏差も他の質問項目に比べて若干高く、また記述による評価においても静粛性が保たれていないとの指摘の多い講義があり、講義によって評価にばらつきがあると思われる。また静粛性の評価は、予想通り授業規模による相関がみられ、大規模教室ほど評価が低くなっている。個別の教員による取り組みもさることながら、学部全体として、私語を減らす取り組みを行っていく必要がある。

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率」および「この授業に積極的に参加した」はそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる一方、「この授業の履修にあたって十分に準備ができていた」

(3.4点)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.3点)はそれぞれ3.5点を下回った。しかし「学問的興味をかきたてられた」が3.7点であることを考慮すると、決して低くはなく、規模の小さい講義を中心に、十分な準備をして、発展的な勉強をしていることがうかがえる。とはいえ、規模の大きな講義を中心に、講義への準備を促し、発展的に関心を持ってもらえるような工夫が必要であろう。また、「シラバスは受講に役立った」についても、3.3点と低い値を示している。シラバスの記述については字数に限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていく努力が必要となる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経営学部では、基礎演習、BL1、BL2の3科目についてグループ集計を行った。理由は、これらの科目が複数コマ展開されており、それぞれ担当教員は違うものの、同一のフォーマットによって開講されているからである。従って、これらの科目については、担当者ごとのばらつきが低いことが望ましいと考えている。

3-2 基礎演習

総合的評価の4項目は、18クラスの平均値がいずれも4.4～4.5点と高い評価を受けている。「この授業を受けて満足した」については、1クラスを除き、すべて4.0点を超えており、下回った1クラスも3.9点であった。これらのことから、クラス間のばらつきもそれほど大きくないといえよう。

3-3 BL1

総合的評価の4項目は、10クラス平均値がすべて4.0点以上であり、高い評価を得ているといえよう。「この授業を受けて満足した」の10クラスの平均値が4.1点であり、またクラス別にみると、最も高いクラスでは4.3点(1クラス)であり、最も低いクラスは3.9点(1クラス)であった。クラス間のばらつきはそれほど小さくなく、全体として高い評価を受けたといえる。

3-4 BL2

総合的評価の4項目は、7クラス平均値がすべて4.0点以上であり、高い評価を得ているといえよう。また、4項目中の「この授業を受けて満足した」については、7クラス平均で4.0点と高い評価を得た。クラス別にみると、一番高いクラスで4.2点(2クラス)であり、一番低いクラスで3.9点(2クラス)であった。このことから、クラス間のばらつきもそれほどなく、高い評価を得ているといえる。

4. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているが、なお授業規模が大きいと相対的に評価が下がる傾向がみられるので、とりわけ授業規模の大きな講義についての対策を検討する必要があると考える。

具体的にいくつか取り上げると、まず静粛性の評価は、「十分な静粛性が保たれた」が

150人を超える規模で3.5点未満となっているように、大規模教室ほど評価が低くなっている。静粛性については、個別の教員による取り組みもさることながら、学部全体として、私語を減らす取り組みを行っていく必要がある。

次に授業から得られたものを示す4項目についても、「自分で調べ、考える姿勢」が50人を超えると3.5点を下回る。これと関連して、学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.4点)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.3点)と、50人を超えると極端に評価が低くなっている。これらの項目から、大規模授業ほど学生の授業に対する姿勢や取り組みが低下していることがうかがえる。また授業の進め方についても、「板書のしかたが適切だった」が、50人を超えると3.5点未満となっており、大規模教室での板書の難しさがあらわれている。

このように大規模教室においては、静粛性、学生の講義への姿勢・取り組み、板書の仕方といった点の困難さが示されている。こうした講義を中心に、あらかじめ教員に注意を喚起するとともに、静粛性の維持を徹底し、板書の仕方などで学生の関心を引くとともに、授業時間外の学習を促進したり、また参加意欲を高めるような工夫が必要である。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

全学の方針である「1 教員 1 科目」に加え、本学部前年度の方針を踏襲し、統一シラバスで展開する複数コマ展開科目（言語科目を除く）と 1 年次の必修の講義科目を対象とした。この選定方針のねらいは、各教員の授業改善という授業評価アンケートの主たる目的に加え、統一シラバスで行っている複数コマ展開必修科目についての評価を得ることで学部カリキュラムの検証の意味合いも持たせることにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 全体

実施状況としては、回答率が 83.06%で、他学部に比べて高めの数値となっている。実施科目の選定条件が学部によって若干異なることや、本学部には 3 年次生までしかいないことから単純比較はできないが、概して学生達の授業への真摯な態度と関心の高さがうかがえよう。

次に、設置項目別平均値について、各大項目別に述べる。まずは授業への学生の取り組みについてであるが、出席率と授業への積極的参加については高めの数値を示しており、多くの学生が授業には前向きな態度で参加していることがわかる。しかし、事前学習や授業後の発展的学習については肯定的な回答をした学生は半数を下回っており、授業外での学習をいかに促すかが課題であろう。授業の進め方については、板書の仕方を除き全ての項目について数値が 4.0 近くで半数以上の学生が肯定的評価をしている。授業から得たものについても上記（授業の進め方）と同じような傾向を示している。若干他と比べると数値は低めではあるものの、自分で調べ、考える姿勢については全学部平均よりも高めとなっており、基礎演習などで自主学習を促していることの効果ではないかと考えられる。総合的評価においても 6 割以上の学生が満足した、わかりやすかった、と回答している。学問的興味が駆り立てられた、という項目については若干低めではあったものの、基礎演習や Cultural Exchange、ないしは言語科目など、学問領域を直接扱っていない科目も含まれていたことを考慮に入れると、決して低い数値ではないだろう。

2-2 グループ集計

統一カリキュラムで実施している必修科目の基礎演習 1（1 年次前期）、基礎演習 2（1 年次後期）、ならびに Cultural Exchange（2 年次前期）について、カリキュラム検証のためグループ集計を行った。

1) 基礎演習 1

今年度より基礎演習 1（前期）と 2（後期）を継続性のあるカリキュラムに変更し、前期は非言語コミュニケーションについて学ぶワークショップと討論を通して発信力を身につける協同学習の組み合わせにレポート執筆の基礎を組み込み、後期は協同学習を更に発展させ、それらを題材にしたレポート執筆の実践も行った。全般的にみて授業への取り組みに積極的な姿勢がうかがえる結果となり、授業の進め方についても適切に行われていたと言えよう。新しい考え方を得たことや自分で調べ考える姿勢については学部平均に比べて高く、初年次教育としての重要な役割を果たしていると思われる。

2) 基礎演習 2

基礎演習 1 同様に全体的には満足度の高い科目となっている。後期になっても出席率ならびに参加度は高い値を維持しており、授業外学習時間も増えている。また、特に専門的知識の獲得や学問的興味については前期より評価が若干ではあるが高くなっている。1年間を通して段階的に教材の量・難易度を上げ、その結果としてより専門性の高いものを後期に扱えるよう組んだカリキュラムの成果ではないかと思われる。

3) Cultural Exchange

実践を通して異文化対応能力を育成することを目的とした科目であるが、評価が平均して 4.0 程度となっており、概して高い評価となっている。ただ、昨年度同様に教員間のばらつきが目立ち、各教員の裁量に任された部分が大きいことが窺える。より安定したカリキュラムにするために工夫を重ねる必要があるだろう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

目立ったテーマは、発展的学習を含めた授業時間外の学習時間の少なさ、私語の問題、そしてシラバスの受講にあたっての有益性などである。発展的学習や私語の問題は学生側の姿勢による部分も多いと思われるが、教員側の努力、工夫も必要であろう。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

映像教材等視覚に訴える教材、講義全般のわかりやすさが評価されたことなどが多く指摘されていたが、一方でわかりやすい、消化しやすい授業が果たして本来学習、探究心を促すことになるのかという疑問も挙げられていた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業の難易度が高いという意見に対しては、難易度は維持した上で具体的な授業方法の改善により徹底した理解を図ろうという姿勢が見受けられる。また、特に講義科目についてはより双方向的な授業形式を意識したものも多くみられた。一方で、学生側の姿勢、態度を問う意見も見られた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

説明の明確さや丁寧さ、映像教材・レジュメの効果的使用、リアクションペーパーへの丁寧なフィードバックなどが肯定的評価として多く見られ、教員による授業の質向上に向けた努力が見てとれる。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業レベルの設定が高い、課題の量が多い、また他の学生の私語を批判するものもあった。

5. 今後の改善に向けて

概して各授業への学生の評価は高く、教員がより質の高い教育ができるよう努力と工夫を重ねていることがうかがえる。今後の課題としては、1) 授業外でどれだけ学習を促すか、2) 授業のレベル設定、そして3) 私語対策が主なものとして挙げられるだろう。1) については、まずは毎回の授業の予習を必要とするようなシラバスを工夫することが第一歩になるのではと考えられる。2) についてはこれから経験を重ねる中で適切なレベルを探っていくことが必要であろう。3) は本学部が例外ではないことから、教員個人のみならず、全学的な取り組みが必要な問題であろう。

また、教員が学生の意見、要望に応えるべく努力すると同時に、学生側の態度、姿勢の変化も求めつつ、双方向の努力で授業や学習の質を高めていくべきであることを再認識する必要があると思われる。

4-8 観光学部

1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を選定した。

- (1) ひとりの教員に1科目以上を対象とする。
- (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする。
- (3) 専門演習、実験、実技をとまなう科目は対象としない。
- (4) 複数教員担当科目は対象としない。
- (5) 集中講義は対象としない。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

全体としての評価は概ね良好で、また全学の平均値との大きな乖離はみられない。

しかし「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の項目だけが平均値が3未満(2.94)となっている。授業がかならずしも受講学生の主体的・発展的学習活動を要請したり促進したりするものにはなっていない可能性がある。そしてこの数値は、学年が下がるにつれて、また授業規模が大きくなるにつれて小さくなっている。つまり、発展的な勉強にはつながっていない。

このことは逆に、学年が進むと、授業をきっかけにした発展的な勉強がなされる傾向にある。これは低学年時の科目の多くが基本的・基礎的な内容であるためとも考えられるが、その授業が意味するより発展的な内容を、ことにそれを観光事象との関連で理解することが初学者では難しいためとも考えられる。

また授業規模別では、151名以上の規模のみで、この「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の平均値が3を大きく下回るようになっており、大規模授業においても学生の主体的・発展的学習を促進するための工夫というものが、さらに検討される必要があると考えられる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほぼすべての教員が、学生からの授業評価が概ね良好であったと認識する一方で、さらなる授業改善への意欲を示している。

「十分な静粛性が保たれた」という項目については、学生の評価は概ね良好であるにもかかわらず、教員の方では問題として強く意識されているケースがいくつか見られる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

板書やレジュメ、パワーポイントの使用などで、「わかりやすさ」の工夫についてはさらなる改善の意欲が示される一方で、ノートの取り方、資料の整理などについては学生自らが主体的に工夫する姿勢もまた重要であり、受身一辺倒になってしまうことはかならずしも好ましくないとの指摘が見られた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

基礎的な科目を中心に、観光事象との関連をより意識した内容を盛り込むことが方針として述べられた。一方でまたここでも静粛性の問題を指摘する教員からは、講義中の私語をなくさせることを強く表明するコメントがあった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

配布されるプリントやレジュメ、パワーポイントがよく工夫されていて、理解がしやすい。説明がわかりやすい。授業のスピードが適切で、講義内容の分量も適切である。静粛性が確保されている。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

板書の分量が多く、書き写すのに精一杯で話を理解しながら聞くことが出来ない。話し方が早すぎる、あるいは声が聞き取りにくい。専門用語などの説明をもっと丁寧にしてほしい。静粛性を確保してほしい。

5. 今後の改善に向けて

授業時の静粛性に関して、科目間で大きな違いが存在するのが現状のようである。専任教員担当の科目においては、おおむね大きな問題としては指摘されていないが、専任以外の教員が担当する科目について、今後はより注意深く対応することが必要である。

観光学部の授業として設置されている意味や、授業内容と観光事象との関連をより理解しやすく改善することで、学生の主体的・発展的学習を促進する。ことに低学年時における対応を工夫したい。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

授業評価アンケートの科目選定方針は、全学の方針として2つの選定方針がある。まず1つは、1教員が1科目の授業評価アンケートを全学・学部・学科で行い、学部間比較を行う。2つ目は、学部・学科などにより集計し、全学集計や学部間比較は行わない。本年度は、1つ目の1教員1科目にて授業評価アンケートを行う年度であり、全ての専任および兼任教員に授業評価アンケートが義務づけられた。この1教員1科目の科目選定を行うにあたり、下記を優先順位として選定した。

(1) 1教員（専任教員・兼任講師とも）1講義科目を原則とした。

選択に際し、複数教員担当科目は除き、次の①～④に示す科目を優先した。

- ① 追加授業日を設定した社会福祉士国家試験指定科目
- ② 社会調査士資格指定科目
- ③ 2010年度新規開講科目
- ④ 専任教員科目は昨年度と異なる科目を優先

(2) 演習・実習系の科目は対象としない

この結果、アンケート対象科目は延べ108科目となった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

- ・ 授業規模：50名以下の授業よりも151名以上の授業への出席率が高い。その一方で授業への取り組みについて（質問項目Ⅰ）の出席以外の質問項目については、授業規模が大きくなるにしたがい、ほぼすべての評価が低下している。他の質問項目においても同様の傾向が見られる。これは、出席率の高さが必ずしも主体的な授業参加や高い授業評価には結びついていないことを示している。
- ・ 本学部の特徴：授業時間以外の学習（設問Ⅰ6）が1.9であり、十分とはいえない全学平均2.1をも下回る結果となっている。これは学部の性質上、ボランティア活動などに積極的に参加しているとも考えられるが、自主的学習を促す対策を講じる必要があるだろう。その一方、映像視覚教材の使用法（設問Ⅱ8）及び授業内容が現在に通じる普遍的な意味を有している（設問Ⅲ4）においては若干高い評価がみられる。
- ・ 学科別の特徴：概してスポーツウエルネス学科の評価が高く、コミュニティ政策学科の評価が低い。特にコミュニティ政策学科は集計データ上のほぼすべての項目において最も評価が低い。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

- ・ 板書の仕方についての設問（Ⅱ7）について、パワーポイントや資料配布で授業を行っているため、板書することはないこと、質問項目から「質問に該当しない」という回答を設けてはどうかという記述があった。
- ・ 授業時間外の自主的学習についての設問（Ⅰ6）について、低い値であること、今後の改善の必要があることが多く記述されていた。
- ・ 150名弱の履修者が受講する授業においてもインタラクティブな授業を試みている（毎回、20～30回学生へ質問する）という記述があった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業環境（静粛であったか）、授業内容（教授法、評価法、難易度）についての学生の記述による評価に対する所見が多くみられた。前者については学生に自覚をもって授業に臨んでもらいたいという記述が、後者については学生の記述を今後の授業運営に活かしていきたいという記述がみられた。ただし、学生の受講姿勢が受け身になっているために教授法においても要求が過度になっているとの指摘もあった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

- ・ リアクションペーパーの内容を授業に反映させる、最新のデータを使って授業運営を進める、自主的学習を促す工夫をするなどの記述があった。
- ・ 受講生が200人を超えると授業の質を保つことが難しくなるとの指摘があった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

映像教材を多く使用している講義、リアクションペーパーのコメントを取り入れている講義、熱心に教える教員の姿勢に対して多くの肯定的評価がみられた。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業中に私語が多いこと、資料の提示の仕方（板書の字が薄い、小さい）、教室の温度設定（寒すぎる、暑すぎる）など授業環境について否定的な意見が見られた。また、学生の意見と授業規模との関連においては、規模が大きいほど（特に受講者数が250名を超えると）否定的な具体的な意見が多くみられた。

5. 今後の改善に向けて

- ・ 授業時間外の自主的学習について：より長い自主的学習を促している授業方法についての方法を共有する。
- ・ 履修者数の多い授業について：抽選等により履修者数を制限する必要があるか否かを検討する。
- ・ コミュニティ政策学科の評価に対する取り組みについて：2012年度カリキュラム再編に向けて、学科のコンセプト、各授業の学科全体の学習の中での位置付けの明確化を進めている。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

本学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

(1) 1 教員 1 科目

(2) 「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない。

なお、一部の複数教員担当科目については、2010 年度に実施された新カリキュラムへの移行に関連して、旧カリキュラムを点検する意味合いを込めて、授業評価アンケートの実施対象科目とした。また、これらの授業評価アンケートを実施した複数教員担当科目についてはグループ集計を行い、運営方法と教育効果にクラス間のばらつきが生じないようにモニターするための資料とした。同様に教育効果に影響する外的要因を検討するため、学部独自の設問を設けている。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率は 62.04% で、全カリと講座を含む 12 の学部等のうち上から 5 番目となり、ある程度信頼できる学部を代表するデータと考えられる。

「IV4 総合的に見て...この授業を受けて満足した」が 2010 年度学部平均 3.89 で、2007 年度 3.60、2008 年度 3.76、2009 年度 3.81 よりも改善されるとともに、一貫して評価値が上昇している。このことは FD の成果として積極的に評価できるものである。

それでは学生の満足度の背景として、授業から何を学ぶことができたのであろう。「III1 自分にとっての新しい考え方・発想」の評価値が 3.98、「III2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」の評価値が 3.93 と高くなっていた。また「III4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」についても評価値は 3.70 と高くなっていた。そして、以上の評価値はすべて全学の平均値を上回っていた。このことは本学部が新しい人間理解のための智を創造しようという志向と照らし合わせたとき、意義深い結果であると言える。いっぽう、「III3 自分で調べ、考える姿勢」の評価値は 3.30 と全学平均値を下回り、「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の評価値も 3.00 と同様の傾向を示した。このことから、教員が FD に関する多面的な努力を継続している一方で、学生の主体性や学びに対する構えが十分に発達していない可能性を示唆していると理解することができる。学生が依存的になっているのではないか、という点について慎重な検討が必要である。

本学部に所属する教員は、「授業の進め方」について、「II2 各回の授業内容の量」を適切に見積もり (評価値 3.96)、「II4 各回の授業内容の明確度」を高め (評価値 4.00)、「II5 十分に静粛な」教室環境の維持に努め (評価値 4.14)、「II8 映像視覚教材の効果的な使用」を工夫し (評価値 3.96)、「II9 授業の準備を周到」に行う (評価値 4.22) という誠実な対応を行っていた。このことは今後の教育研究活動と教育成果の向上に生かせるものと考えられた。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

各担当教員は、学生による授業評価を真摯に受け止め、以下の諸点を挙げていた。

- ① 学生の興味・関心・意欲を喚起するため、より一層魅力的な授業づくりを行うこと
- ② 学生の主体的な授業参加を促すため、学生の基礎学力を宿題や正課外の学習機会を

活用すること

- ③ 学生の理解がより一層促進されるよう、丁寧かつ具体的な説明などわかりやすい授業づくりに引き続き努めること

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

各担当教員は、学生による記述評価を有効なフィードバック源として、改善すべき点の明確化に役立てていた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

各担当教員は、改善に向けた今後の方針として、課題（宿題）の洗練化に努め、学生の発展的な学習が促されるよう配慮することを多く指摘していた。むろん、限られた授業時間や授業回数のなかで取り上げる例示や学生に行わせるワークを精選して、学習成果（一部に体験内容を含む）の深化を導こうとする意向を読み取ることができた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

クラスサイズを縮小した授業において理解度が促進されたり、リアクションペーパーを活用して、講義科目であっても双方向性を確保する努力をしている授業では、肯定的な意見が多くみられた。授業の目標やねらいに応じて（前者については特に）柔軟に検討する余地がある。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

例年と大きな差異はなかった。学生自身の私語、教員の声量や板書・配付資料等の改善を求める声に対しては、すぐにでも技術的にクリアできる。低学年次ではどのようにテスト対策を講じたらよいかということに対する不安が、高学年次では専門技術や英語・数学の基礎学力をめぐる問題が、それぞれ挙げられており、これらの個人差を含む課題については対応を検討する必要がある。

5. 今後の改善に向けて

学生による授業評価アンケートを経年実施し、その結果を比較・検証することにより、教員のFDは着実に進み、学生に対する教育効果を高めることに十分貢献していることが示唆された。けれども、教員がわかりやすく、丁寧な授業を行い、用意周到に学生の正課外の活動を保障する誠実な取組を進めれば進めるほど、授業時間外における学生の主体的な研究・調査、発展的な学習の妨げになることが危惧される。（同様の懸念は2009年度の総評においても表明されている。）

大学の授業が学生と教員の相互作用により成立し、学生も大学を構成する重要な一員であるという自覚のもとに、教員とともに大学教育をより良くするための意識が大切である、とする「授業評価アンケート」の趣旨をいま一度再確認する必要があるであろう。そして、そろそろ大学授業の改善・改革が教員の手により達成されるというだけではなく、「全学学生FD委員会（仮称）」のような組織を設けるなどして、学生自身による主体的な学習改善の努力と連動させる動きも大切になるのではないだろうか。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

2010年度は全カリ総合Aのうち、講義系科目を担当する教員1名につき1科目とし、合計229科目で実施された。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

履修者総数40,776名から22,563通(回答率55.33%)の回答があった。この回答率には他学部との差はほとんどないと考えられる。なお全カリの回答者数は総回答者数の約23%を占めている。

1) 設問科目別平均値の全体的傾向

全学と比較して、0.1ポイント以上低い設問項目は、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」、II5「十分な静粛性が保たれた」、III3「自分で調べ考える姿勢」の4項目、逆に0.1ポイント以上高かった設問項目はII8「映像視覚教材の使用が効果的だった」の1項目である。

I4については、全カリ総合科目自体がその科目での自己完結的な性格を持ち、専門の発展的・積み上げ的な科目ではないことから当然の帰結と思われる。II5でポイントがやや低いのは、やはり大人数教室での講義が多いことを反映していると思われる。I6の学習時間が短いのも、学生にとって、専門科目よりも全カリ科目における予習・復習などの重要性が低いからであろう。

これに対して、多くの全カリ教員が視覚教材を効果的に使っていることがプラス評価につながっている点は、先ずは歓迎すべき傾向と言える。しかし、視覚教材の多用は、ある意味で言語による思考の停止を誘発することにも繋がりがねず、その観点から、今日の大学に於ける「ポピュリズム的教育」の脆さを露呈しているという分析も可能である。

2) 「授業規模別平均値」の特徴

授業全体を通じての出席率は、授業規模とほとんど関係がないという結果が出た。しかし、II5「十分な静粛性が保たれた」では前項で示唆したように、50名以下の4.46から、151名以上の3.34へと、受講人数に逆比例する形で「きれいに低下」している傾向があり、私語と人数の関係は統計上の関数として証明されている。当然、V2「この授業の受講者数は適切だった」の項目では101名以上のクラスで、低い評価が見られた。

3) 「学年別平均値」の特徴

学部学年別の回答者数を見ると、全カリでは予想通り1年生が多く、全カリ全体の回答の41.1%を1年生で占めていた(4年生は9.9%、どちらも学年不明は母数に算入していない)。当然、1年生の意識が調査結果に大きく反映してくるものと思われる。

全カリでの学年別の傾向について分析すると、まずI1「出席率」は学年が進むにつれて低下し、1年から4年になると0.43ポイントも減じている。一方、I3, I4, I5, I6の4項目は学年が進むにつれて高評価を得ており、学生側の受講姿勢がより能動的にな

っていることがわかる。

Ⅱ「授業の進め方」、Ⅲ「授業から得たもの」、Ⅳ「総合評価」は、そのほとんどで学年が進むにつれて高くなる傾向が見られた。逆に言えばこれらの項目が下位の学年、とくに1年生で低い傾向が見られたということになる。その一因として、中学・高校での授業形態から中々脱却できず、その結果大学の講義の形態へ、短期間で十分に順応しにくい現況を反映していることが予測される。

4) 相関係数表について

いくつかの関連のある項目があげられているが(Ⅱ3とⅡ4、Ⅱ3とⅣ2など)、そもそも関連性の近い設問同士の相関であり、よってほとんどは自己相関の撞着に陥っており、あまり意味が認められないと思われる。

たとえばⅡ3「授業のねらいは明確だった」とⅡ4「授業内容は明確だった」は、学生にとって、設問自体がほとんど区別し難いのではないかと思われる。またⅡ3「授業のねらいは明確」なら当然Ⅳ2「授業全体の目標は明確」なはずであり、Ⅳ1「わかりやすい授業」ならこれも当然Ⅳ4「授業を受けて満足」すると答える学生が多くなるのは、事理明白と言わねばならない。

アンケート結果から浮き彫りになった難点は、毎年繰り返されることだが、大人数授業に起因する弊害である。クラスサイズが大きくなると、教室の静粛性が保たれず、その結果、積極的に講義に取り組もうとする学生が、潜在的抗議の意図を込めて低評価を下すのは当然の帰結である。なお、こうした分かり切った事柄を毎回再確認して、アンケート結果を分析することに、一体如何なる意義と有効性があるのか、大いに疑問を感じる点を強調しておきたい。

3. 今後の改善にむけて

全カリでは、2012年度改革で抽選による全クラス平均150名(あくまで想定人数)規模を実現させる計画に取り組んでいる。また、各学部が提供する領域別科目群のように、学生にとって異質な思考法や、より専門性の高い授業内容を提供し、いわゆる「カルチャーセンター」化を若干余儀なくされている現状を打破する予定でいる。

なお、大規模クラスで静謐性が保たれない原因の一部は教員側の授業への取り組みに帰する部分もあるかもしれない。しかし、そもそも大学教員の場合、現在問題になっているような大人数クラスにおける“教育力”(クラスのマネジメント能力)が、採用人事の評価材料にされていない以上、仕方がない側面があることも否めない。

だが、原因は教員側にのみあるわけではもちろんない。そもそも、大学進学率が、団塊の世代が大学生になったときの17%だった時代から、過半数になってしまった現在の高学歴社会日本(学歴だけは高い社会)の現状を考慮に入れる必要がある。それは当然、学生の質の低下をもたらしている。百歩譲って、質がそれほど低下しているとは断言できないにしても、「末は博士か大臣か」、「学士様ならお嫁にやろか」といった表現に凝縮されているような、国のエリート養成機関としての大学は、今の日本にはごく少数しか見当たらない。加えて、少子化傾向の促進に起因する親離れ年齢の遅れも手伝って、大学生が異様なほどに幼児化している点も見逃せない。さらに、幼い頃から「人権」や「権利意識」が、

必要以上に声高に叫ばれる社会に育った学生が多く、「私語も人権」と嘯く「御仁」まで存在する現状は相当歪んでいる。この種の「幼児化した学生」で埋まった大人数教室の静肅性を保つには、並大抵の努力では到底足りないだろう。

4. 総合Aの各カテゴリーの総評

4-1 「人間の探究」

全カリは履修者数、回答数ともに全学の四分の一弱に相当し、その平均値はほぼ全学のそれを示している。このカテゴリーの各項目平均値は、全カリの他のカテゴリーと比較すると、わずかに低い項目が多く、全カリの平均値を下げていると言える。

ただし、その差はわずかで顕著な特徴を示すほどではなく、また全カリ全体として見ると、昨年度よりこれまたわずかではあるが上がっている項目がほとんどである。全体として改善努力がなされ、学生側も肯定的に受けとめる傾向があるものと見て、さほど間違いではないだろう。

平均値の中で、敢えて見逃すべきではない項目を挙げるとすれば、IV「総合評価」のとくに4「満足度」である。これを上げていく方途として何があるだろうか。授業の目標やわかりやすさ(II3, 4/IV1, 2)がこれと強い相関を示すのは自明であろうが、担当教員の所見からは、どの教員も相当工夫し努力している様子が窺える。

授業規模(履修者数)により満足度に大きな差がないのは、各教員、とりわけ大規模授業担当教員の努力の証左とも推測されるが、履修者数が増すにしたがい静肅性維持(II5)に困難を極めるのは明らかである。所見には、学生のマナーの悪さと大学のサポートを訴えるつぶやきが滲み出ており、悲鳴に近い余韻を残している。

また、学年を重ねるにつれ(回答数は減少するものの)肯定的な評価が増し、例えば、多くの教員が判で押したように「反省」するI4「発展的学習」やI6「自主学習」、さらにはII9「教員の準備評価」、そして満足度が有意な差を示していることは、初年次教育の困難さという課題を提起するものと考えられる。

担当教員と熱心な学生たちのためにも、所見の記述には、大学全体として誠実に応えていく必要がある。

4-2 「社会への視点」

前年度からの傾向に大きな変化はない。一部の項目を除き全学平均よりも数値が高かったのは、全カリ総合科目の履修者が自ら希望する科目を取って意欲的に授業に参加し、教師もよくそれに応えていることの証左と言える。ことにIII4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」のポイントが、FB科目(「社会への視点」)が最も高いことは、このセクション設置のねらい通りの結果である。

他方で、全学平均よりも低かったII5「十分な静肅性が保たれた」での、FB科目のことに低いスコアは、全カリ社会科学分野に固有のこの宿痾が依然深刻であることを窺わせる。この問題が受講者数と関係していることは受講者数別データからもわかるが、全カリの独自設問V2「この授業の受講者数は適切だった」がFB科目が最も低く、またII5と最も強い相関を示す設問がV2であることから明白である。III3「自分で調べ、考える姿勢」が身についたと答えた受講生が全学平均より少ないという結果もやはりこれと関係していよ

う。

所見票からは、悪条件の中で各教員が苦闘している様子が見て取れる。大学で教えた経験が少ない教員はもちろん、ベテランでも、全学部・全学年の学生を相手にする全カリ総合のような授業には慣れていないためか、学生を惹きつけるべく様々な試行錯誤が行われている。リアクションペーパー、視聴覚教材、ゲストスピーカー等の効果は旧来指摘されている通りだが、問題はそれらが個々の教員のノウハウに留まっているという点である。年に一度の担当者連絡会で、そうした技術を教え合うのが難しい以上、何らかの手段（たとえば自由参加のFDワークショップのような）を講じなければ「宝の持ち腐れ」は今後も続くであろう。また、欠席者への資料配付や受講者の反応把握など、CHORUSを使えばかなりの程度解決可能な問題に悩む教員も依然存在している。そうした面での啓蒙も不可欠である。

4-3 「芸術・文化への招待」

このカテゴリーは、昨年度は全カリの他のカテゴリーと比較してほとんどの項目が最下位であったが、今年度はむしろI4「発展的学習」、I6「自主学习」などで最上位を示しており、全体として改善傾向が見られた。

ただし、これら最上位の項目は、大学全体としては最も低評価で課題を残す項目であり、このカテゴリーも低スコアであることに変わりはない。また、II「授業の進め方」では、8「映像視覚教材の効果」が高評価の一方で、「わかりやすさ」(1,3,4)や「静粛性」(5)は依然としてやや低い評価となっている。

その結果は、総合的満足度(IV4)にも表れていると考えられる。年々低下傾向にあったことが懸念された点は改善されたが(昨年度3.69 → 今年度3.86)、3年前には及ばなかった(2007年度3.92)。

所見からは、担当教員たちの悪戦苦闘の跡が窺われる。代返や私語、途中入退室といった授業妨害への対策が、もはや教員個人の努力の限界を突きつけるものであることは、繰り返し指摘されてきた。リアクションペーパーの代筆、それへのきわどい対応を物語る所見も見られる。全学的ガイドラインの作成を訴える声には、耳を傾けてみるべきだろう。

ある教員は、「学問とは楽しいものだと思い込ませようとする昨今の大学の姿勢は欺瞞でしかないことを、学生側も認識して授業を受けるべき」であり、反時代的と言われようと、「ポピュリズムのスタンスは捨てて、もう少し学生に対して不親切になったほうがいい」と述懐している。

こうした本質的で総括的な指摘に対し、真摯に立ちどまることにこそ、学生の記述による評価、そして担当教員の所見記入の意味が現れるものと考えられる。

4-4 「心身への着目」

全カリ総合科目「心身への着目」の科目群は、心理学、スポーツ科学、ウェルネス科学、福祉学の各分野から構成されている。アンケート回答者数と科目数から算出した平均クラスサイズは、5つの総合科目群中最も多く、大人数科目が比較的多い傾向にあるのが特徴である。他の科目群と比較すると、II「授業の進め方」に関する項目では9項目中6項目、IV「総合的評価」ではすべての項目で最高値を示し、担当する教員の講義形式、内容が高

く評価されていることがわかる。一方で、Ⅰ「授業への取り組み」に関する項目では、自学自習時間が最も少なく、発展的な学習ができていない傾向が見られた。さらに、Ⅲ「授業から得たもの」に関する項目でも、「新しい考え方・発想や専門知識」を得ることができたが、「自分で調べ、考える姿勢」を得ることは十分にできていないことが示唆された。

これらの結果から、大人数科目が多い中各教員が工夫して、魅力的な授業を展開していることが示唆された。今後は、CHORUSなどの自学自習支援システムを利用しながら、自分で調べ、考える姿勢を習得できるような、さらなる工夫が必要であると考えられる。

4-5 「自然の理解」

今回は全カリ総合FEの〔自然の理解〕分野からは35科目について実施され、1,997回の回答があった。前回と同じく、アンケートのどの項目についても、他の4分野(FA~FD)との大きな差はなかった。また全学の平均と比較しても、大きな差が出た項目はほとんどなかった。

あえて全カリ平均と0.05ポイント以上の差がある項目を見ると、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」が全カリで4.00であるのに対し、FEでは3.88と0.12ポイント低かった(自然系の教員はしゃべり方が下手?)。またⅣ1「わかりやすい授業だった」については、全カリ平均で3.92であるのに対し、FEでは3.85と0.07ポイント低かった(これはしゃべり方ではなく、素材の取っつきにくさの問題かも知れない)。Ⅱ6「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」は、全カリ平均で3.84であるのに対し、FEでは3.78と0.06ポイント低いという結果が出た。これはおそらく自然系の講義ではパワーポイントなどの視覚教材の使用が多く、いわゆるレジュメや文献を材料に講義することが少ない為と考えられる。

一方、FEの方が、評価が高かった項目はⅡ7「板書の仕方が適切だった」は、全カリ平均で3.34であるのに対し、FEでは3.41と0.07ポイント高く、Ⅱ8「視覚教材の使用」では全学で3.99であるのに対し、FEでは4.04と0.05ポイント高かった。自然系の講義の方が、板書で書く文字も少なめで、記号や図も多く、その点でのわかりやすさがあったのだと思われる(ただし数式などにはアレルギーがあるらしいことが学生のコメントからうかがわれる)。またパワーポイントの使用で、視覚的には学生にわかりやすい講義になっているのだと思われる。特筆すべきはⅡ5「十分な静粛性が保たれた」で、全カリ平均で3.70であるのに対し、FEでは3.89と0.19ポイント高かった。これはかなりの差である。自然系の講義が“わかりやすさ”で評価が低い一方で教室の静粛性があるのは不思議なことであるが、“わかりにくい”が故に、「寝ている」学生が多いのが理由かも知れない。しかしV2の「受講者数が適切か」は、全カリ平均で3.94に対し、FEが4.03と、0.09ポイント高いので、「自然の理解」分野では、相対的に大人数講義が少ないことを単純に反映している可能性もある。

評価に対する担当教員の所見を読むと、ほとんどの教員が、学生の声を真摯に受け止め、授業改善への努力をしようとしていることがわかる。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

各教員の主要な講義科目について、1 教員 1 科目の授業評価を行ってきている。これは継続的評価を行うことにより、各教員の改善・工夫、その評価について検討する資料となると考えているためである。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

「回答者に関する集計」からは、回答率が 77.05%と、全学平均の 55.51%をはるかに超えており、異文化コミュニケーション学部 (83.06%) に次ぐ高い数値を示している。講座学生の出席率の高さを示しているとされる。また学年別回答者数の偏倚、1・2 年生に多く、3・4 年生に少ない点は、1・2 年生の段階で講座科目を集中して履修しているためである。

次に全学の「設問項目別平均値」と比較して、講座の各設問の項目についてみる。

I「この授業への取り組み」においては、出席率と積極的な参加については評価 4 以上、他は 3 段階であるが、I 6 の「授業時以外の学習時間」においては、2 段階となっている。この点については、ある意味で課題とすべきか否か、検討すべき点がある。

II「授業の進め方」においては大方が評価 4 以上であるが、II 7「板書のしかた」・II 8「映像資料の使用」に関しては 3 段階となっている。この 2 点については今後の課題ともされているだろう。

III「授業から得られるもの」においては、III 1「新しい考え方・発想」・III 2「専門知識」が評価 4 であるが、その他は評価 3 である。これは資格取得をめざした講座科目としては、当然のことともされる。

全体的に見て、学生から評価は 4 の段階であり、学生の評価は高いとされる。多くの項目で数値が高くなっている点は、昨年度より教員側の種々の改善・工夫の結果を示している証であろう。

「設問項目別平均値 (講座) の回答割合」「課程別平均値」からは、上記「設問項目別平均値 (講座)」において評価 4 以上となっている項目においては、当然ながら 80%前後の学生が高い評価を示していることとなる。課程別に見た場合に、学芸員が該当科目 2 科目のため該当科目の特性が出ている可能性があるが、講座全体の傾向と同様である。「授業規模別平均値」・「学年別平均値」に関する講座と全学と比較では、講座が相対的に高い評価を見出すことができる。ただし、講座における有意な所見としては、授業規模について、50 名以下クラスが評価が高いという特徴も見られる。151 名以上も、高い評価 (例えば、IV「総合的にみて…」IV 4 (4.55)) であるが、該当科目が 1 科目のため、該当科目の特性が強く出ている可能性もある。

講座における各設定項目の相関では、IV「総合評価」において、特にIV 2「授業目標の明確さ」・II 3「授業のねらいの明確さ」・II 4「授業内容の明確さ」が深く関係しており、その点で「わかりやすく」講義したものが高い評価を得ている。さらにIV 4「授業の満足度」に関して、I「授業への取り組み方」・II「授業の進め方」・III「授業から得たもの」に、判断基準が置かれる。これは、当然であるが、授業者と学生との間に意欲的な「教授・学習活動」が成立するとき、「授業の満足度」(学生)が高まることを意味する。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が自らの授業に関しての学生評価を、各項目における自己の評価との間に大きな懸隔を示さないものとして理解している。

ただし、設問項目の妥当性について、例えば、教職科目という性格から、IV3に関して「この科目は学問的興味を興させることが目的では」なく、「教えるための知識や技術が身に付いたか、現代の教育が抱える課題や問題が理解できたか、教師にとって必要な資質や考え方が理解できたのか」といった設問のほうが適切ではないのかという、意見もあった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生から高い支持を得ている参加型授業などは、さらに積極的に展開しようとする意見が見られる。また学生の不満（ex. 一方的講義型授業・出欠の取り方）・改善要求（パワーポイント映像劣化など）に対しては、その指摘を真摯に受け止め、改善するとされている。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

評価の低い点、「板書」・「視聴覚教材」の改善に向けて姿勢を示す所見が多い。さらに「授業時以外の学習」についての工夫を考えようとする教員が見られる。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

参加型授業、グループ討議、リアクションペーパー、ロールプレイといった方法を取り入れた授業への評価が高い。また視聴覚教材を使用している講義には高い評価が示されている。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

多くはないが、板書の仕方、パワーポイントの提示法、レジュメの内容、出欠の取り方、遅刻者への対応などへの意見、不満などが見られる。

5. 今後の改善に向けて

前年度と比べ、個々の項目で評価（ex. IV「総合的にみて…」（講座共通）IV1（4.13）、IV2（4.04）、IV3（3.78）、IV4（4.00））が高くなっており、それは各年度における各教員の努力の結果であろう。それは今後とも継続される必要がある。

ただし、I6「授業時以外学習」の評価1段階については、その対策として、単に課題提出といった方法によるべきではないとする意見（シラバス・参考文献・サイト紹介の充実等）もあり、その点で、今後の検討課題として残っている。

5. 2010 年度のまとめと今後の展望

2010 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 東條 吉純

2009 年度の教育改革推進会議において決定された「基本方針」は、授業評価アンケート制度の中期的な実施計画であり、2010 年度の授業評価アンケートは、同方針にしたがい、「1 教員 1 科目」の原則による実施が行われた。ここに至り、授業評価アンケート制度は本学においてほぼ定着し、本学における教育インフラの一部として、安定的に実施できる環境が整備されたものと評価できる。

同時に、授業評価アンケート制度は、新たな段階に向けて動き始めている。すなわち、学部等によるアンケート結果データの積極活用に向けた組織的な取り組みの動きがそれであり、2010 年度実施においては、「1 教員 1 科目」の原則による実施の方針であったにもかかわらず、多くの学部において、ベースラインとして同方針に沿った科目群を選定すると同時に、初年次教育科目・必修科目を中心に追加的に実施科目が選定された。

この小さな事実は、実のところ、非常に重要な含意をもっている。7 年間の実施経験の中で、当初の 3 年間（2004～2006 年度）は、教員個々人の意識を高め、自己研修の資料を得るという目的を中心に実施（＝「1 教員 1 科目」の原則）、続く 3 年間（2007～2009 年度）は、学部等が組織としての教育力向上に役立てるという目的を中心に実施（＝学部等の必要性に応じた実施科目選定）、がそれぞれ行われた。これらは、いずれも全学一律の方針に、各学部等が従ったものである。

これに対して、上記の 2010 年度の科目選定結果は、学部等の教育責任部局が、全学的な実施方針を超えて、学部固有のニーズから自発的に実施科目を追加選定したものであり、各学部が、アンケート結果データの集計・分析を、カリキュラムの有効性の測定・カリキュラム改革・教育方法改善等の教育力向上のための資料として積極的に活用しようとする明確な姿勢が見て取れるからである。

このような学部等の新たな動きに対して、本委員会は次のような姿勢で臨みたい。すなわち、第一には、現在の実施体制の人的・物的制約の許容する範囲内で、できるだけ学部等の個別ニーズに対応し、アンケート実施科目の追加選定に応えること、第二には、社会情報教育研究センター（CSI）とも連携を図りつつ、学部等の教育力向上に向けた組織的な取り組みの動きに対して、アンケート結果データの集計・分析の面で適切なサポートを行うこと、である。

また、2010 年度においては、2011 年度実施に向けて、実施上の問題点として指摘された学部意見を反映する形で、以下のような改善を行った。

- ① 板書の仕方や視聴覚教材の利用など、全科目には該当しない設問があるとの意見に対応して、回答選択肢に「該当しない」を追加する。
- ② WEB 実施の要望及びアンケート実施時期の自由選択の要望に対応して、アンケートの設問項目をコースに搭載し、学部等が選定し紙媒体で全学一斉に実施されるアンケートとは別に、すべての科目について、科目担当者が必要に応じて WEB 上でいつでも何度でもアンケートを実施できる環境を整備した。

- ③ 外国人留学生に対するアンケート実施について、アンケート用紙の設問以外の部分も英訳を追加するとともに、「記述による評価」欄の業者による転記の正確性を向上するため、学生に対して丁寧な記述を心がけるよう指示する注意文を追加した。

以上のように、本学における授業評価アンケート制度は、年々着実に進化している。まだまだ克服すべき課題も少なくないが、立教大学の教育力向上という目的のため、アンケートの安定的実施はもとより、アンケート結果データの積極活用の取り組みに対しても、できる限りのサポートを行っていきたい。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 97,987 名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	14,821	9,700	65.45
経済	20,966	9,944	47.43
理	7,668	4,752	61.97
社会	19,120	10,274	53.73
法	18,484	6,633	35.89
経営	15,863	8,999	56.73
異文化コミュニケーション	2,444	2,030	83.06
観光	12,056	7,529	62.45
コミュニティ福祉	11,395	6,938	60.89
現代心理	8,854	5,493	62.04
全学共通カリキュラム	40,776	22,563	55.33
学校・社会教育講座	4,065	3,132	77.05
合計	176,512	97,987	55.51

注1) 履修者数・回答者数はアンケート実施科目の延べ履修者・回答者

注2) 学部等はアンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	953	3,301	3,737	1,531	178	9,700
経済	2,930	2,438	2,686	1,684	206	9,944
理	1,621	1,363	1,333	305	130	4,752
社会	3,506	3,399	2,418	744	207	10,274
法	1,353	1,941	2,094	1,128	117	6,633
経営	3,520	2,553	1,730	777	419	8,999
異文化コミュニケーション	1,034	525	360	26	85	2,030
観光	1,255	3,177	2,300	670	127	7,529
コミュニティ福祉	1,686	1,980	2,536	597	139	6,938
現代心理	1,504	2,061	1,462	351	115	5,493
全学共通カリキュラム	9,011	6,370	4,385	2,173	624	22,563
学校・社会教育講座	1,298	1,066	569	85	114	3,132
合計	29,671	30,174	25,610	10,071	2,461	97,987

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 全学集計

表3 全学平均値

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	97,789	4.58	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	97,747	3.85	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	97,671	3.14	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	97,565	3.06	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	97,191	3.43	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	97,560	2.10	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	97,708	3.92	1.06
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	97,683	3.92	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	97,642	3.90	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	97,551	3.93	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	97,511	3.84	1.12
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	97,466	3.80	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	97,003	3.36	1.08
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	96,968	3.77	1.13
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	97,352	4.15	0.89
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	97,585	3.83	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	97,569	3.81	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	97,533	3.34	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	97,356	3.68	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	97,546	3.85	1.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	97,531	3.87	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	97,516	3.73	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	97,522	3.82	1.06

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表4 学年別平均値

学年別延べ回答者数

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答者数	29,671	30,174	25,610	10,071	95,526

注) 学年は、当該学部で実施したアンケートに回答した学生の学年

学年別平均値(全学)

設 問 項 目	1年	2年	3年	4年
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4.72	4.60	4.52	4.24
I 2 この授業に積極的に参加した	3.93	3.82	3.81	3.81
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.11	3.14	3.16	3.13
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2.95	3.07	3.12	3.19
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3.20	3.42	3.59	3.67
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2.09	2.14	2.04	2.11
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	3.84	3.89	3.97	4.10
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3.85	3.89	3.97	4.09
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3.82	3.88	3.94	4.06
II 4 各回の授業内容は明確だった	3.85	3.91	3.98	4.10
II 5 十分な静粛性が保たれた	3.66	3.86	3.97	4.02
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.71	3.79	3.86	3.94
II 7 板書のしかたが適切だった	3.27	3.34	3.41	3.51
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	3.74	3.76	3.80	3.81
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.11	4.13	4.19	4.26
III この授業から得るものができたこと				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3.77	3.79	3.88	3.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.75	3.79	3.86	3.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.26	3.33	3.39	3.50
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.57	3.65	3.77	3.89
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	3.77	3.81	3.90	4.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3.79	3.85	3.93	4.06
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3.65	3.70	3.79	3.95
IV 4 この授業を受けて満足した	3.73	3.78	3.88	4.04

注) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表5 授業規模別平均値

授業規模別延べ回答者数およびアンケート実施科目数(全学)

授業規模	50名以下	51~100名	101~150名	151名以上	合計
回答者数	18,381	29,494	23,773	26,339	97,987
科目数	728	413	193	126	1,460

注) 授業規模は履修者数ではなく、実際の出席者数に近いと思われる回答者数を使用した。
 下表の平均値は、授業規模別の科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出した。

授業規模別平均値(全学)

設 問 項 目	50名以下	51~100名	101~150名	151名以上
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4.58	4.55	4.56	4.62
I 2 この授業に積極的に参加した	3.96	3.82	3.81	3.85
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.32	3.11	3.09	3.09
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.30	3.05	3.02	2.95
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3.49	3.42	3.41	3.40
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2.39	2.08	2.04	1.98
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	4.01	3.90	3.86	3.92
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3.96	3.92	3.87	3.94
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3.98	3.90	3.86	3.87
II 4 各回の授業内容は明確だった	4.02	3.93	3.89	3.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	4.29	3.99	3.74	3.45
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.93	3.80	3.76	3.74
II 7 板書のしかたが適切だった	3.52	3.38	3.31	3.26
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	3.75	3.73	3.75	3.84
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.22	4.14	4.12	4.14
III この授業から得るものができたこと				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3.95	3.78	3.79	3.82
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.94	3.82	3.78	3.75
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.59	3.32	3.29	3.25
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.78	3.65	3.66	3.68
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	3.93	3.83	3.81	3.85
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3.98	3.87	3.84	3.84
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3.85	3.71	3.69	3.72
IV 4 この授業を受けて満足した	3.94	3.79	3.77	3.81

注) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

6-3 学部等別平均値

表6 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,683	4.59	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	9,685	3.86	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,676	3.14	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,661	3.13	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,631	3.68	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,664	2.03	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,679	4.04	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,678	4.02	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,663	3.97	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,658	4.02	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,656	4.07	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,651	3.97	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	9,623	3.43	1.05
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	9,608	3.73	1.13
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,647	4.25	0.82
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,671	3.92	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,670	3.91	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,663	3.37	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,643	3.73	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,667	3.97	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,666	3.96	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,662	3.89	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	9,664	3.95	0.99
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	9,487	4.25	0.92
V 2 この授業の受講者数は適切だった	9,480	4.22	0.89

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表7 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,921	4.46	0.84
I 2 この授業に積極的に参加した	9,921	3.83	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,918	3.16	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,904	3.11	1.10
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	9,864	3.29	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,902	2.26	1.12
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,915	3.82	1.10
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,914	3.81	1.02
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,906	3.81	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,892	3.84	1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,890	3.76	1.15
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,886	3.65	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	9,842	3.32	1.10
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	9,795	3.45	1.17
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,878	3.98	0.95
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,898	3.57	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,898	3.73	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,889	3.32	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,874	3.55	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,890	3.74	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,885	3.79	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,888	3.57	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	9,885	3.69	1.08
V 学部等による設問			
V 1 (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった	7,481	4.15	0.94
V 2 (基礎ゼミナール2) 英語で経済文献を読む力が増した	552	3.44	1.02
V 3 (基礎ゼミナール2) レジュメやレポート作成の際に英語文献にまで 視野が広がった	551	3.11	1.18
V 4 (情報処理系科目) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった	473	3.68	0.90
V 5 (情報処理系科目) Power Point ファイルの作成ができるようになった	475	3.85	0.91
V 6 (情報処理系科目) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できる ようになった	475	3.55	0.96

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表8 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,742	4.69	0.64
I 2 この授業に積極的に参加した	4,739	3.91	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,737	3.23	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,732	3.17	1.08
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	4,726	3.18	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,733	2.44	1.10
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,737	3.67	1.17
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,733	3.68	1.06
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,737	3.74	1.04
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,730	3.77	1.04
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,728	3.82	1.13
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,723	3.57	1.14
II 7 板書のしかたが適切だった	4,718	3.37	1.16
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的だった	4,666	3.41	1.19
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,715	3.93	1.00
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,728	3.66	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,728	3.71	0.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,724	3.44	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,714	3.41	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,728	3.60	1.15
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,725	3.72	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,726	3.55	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	4,726	3.62	1.11
V 学部等による設問			
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,499	3.85	0.99
V 2 (1年次前期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	692	3.30	1.05
V 3 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,326	3.69	1.11

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表9 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	10,261	4.57	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	10,259	3.76	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,249	3.05	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,239	2.99	1.07
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	10,193	3.40	1.03
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	10,234	2.04	1.05
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,242	3.85	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,237	3.87	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,235	3.81	1.00
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,217	3.84	0.99
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,223	3.68	1.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,211	3.72	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	10,182	3.26	1.05
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	10,178	3.78	1.12
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,195	4.13	0.87
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,231	3.80	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,228	3.75	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,223	3.29	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,205	3.70	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,221	3.77	1.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,222	3.79	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,221	3.67	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	10,221	3.76	1.05

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表 10 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,613	4.50	0.84
I 2 この授業に積極的に参加した	6,610	3.77	1.04
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,596	3.00	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,594	2.97	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,571	3.39	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,595	2.22	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,606	3.89	1.11
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,599	3.88	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,600	3.83	1.05
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,596	3.86	1.05
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,594	4.03	1.03
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,587	3.77	1.09
II 7 板書のしかたが適切だった	6,526	3.26	1.12
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	6,464	3.28	1.23
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,583	4.10	0.92
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,590	3.82	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,591	3.85	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,589	3.36	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,576	3.75	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,595	3.78	1.13
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,595	3.83	1.05
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,593	3.76	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	6,589	3.82	1.07

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 1 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	8,978	4.68	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	8,972	3.98	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,965	3.43	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,963	3.36	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,931	3.36	1.10
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	8,954	2.54	1.20
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,967	3.91	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,968	3.88	1.02
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,966	3.94	1.00
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,966	3.95	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,954	3.75	1.13
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,953	3.79	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	8,911	3.49	1.09
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	8,928	3.88	1.06
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,933	4.14	0.91
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,954	3.85	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,948	3.91	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,947	3.61	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,930	3.75	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,948	3.87	1.08
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,946	3.94	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,945	3.76	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	8,945	3.86	1.09

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 2 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,022	4.77	0.50
I 2 この授業に積極的に参加した	2,022	3.92	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,021	3.33	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,021	3.23	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,003	3.24	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,014	2.34	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,023	3.99	1.10
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,023	3.95	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,023	3.86	1.04
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,021	3.91	1.04
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,020	3.78	1.10
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,021	3.87	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	2,009	3.37	1.06
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	2,008	3.75	1.14
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,019	4.21	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,024	4.01	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,022	3.82	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,019	3.59	1.07
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,017	3.78	1.02
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,019	3.85	1.13
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,020	3.86	1.06
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,019	3.74	1.14
IV 4 この授業を受けて満足した	2,020	3.82	1.13

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 3 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,517	4.54	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	7,510	3.79	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,500	3.10	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,497	2.94	1.06
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	7,465	3.36	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,495	2.00	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,506	3.80	1.09
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,507	3.87	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,502	3.82	1.00
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,495	3.85	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,498	3.80	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,490	3.74	1.07
II 7 板書のしかたが適切だった	7,445	3.35	1.06
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	7,473	3.81	1.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,474	4.15	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,492	3.72	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,495	3.75	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,493	3.30	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,475	3.58	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,495	3.72	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,491	3.77	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,491	3.58	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	7,494	3.67	1.09
V 学部等による設問			
V 1 わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ(観光学部以外の学生 は答えないこと)	6,967	2.92	0.94
V 2 わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	7,309	3.88	0.98
V 3 わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	7,305	3.96	1.06
V 4 わたしは、旅行することが好きだ	7,302	4.49	0.80
V 5 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識 した	7,284	3.45	1.08
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	7,292	3.24	1.13
V 7 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	7,291	3.38	1.13

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表14 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,930	4.50	0.69
I 2 この授業に積極的に参加した	6,928	3.82	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,923	3.12	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,909	3.07	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,892	3.49	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,917	1.90	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,927	3.89	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,927	3.98	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,922	3.94	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,922	3.96	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,908	3.91	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,912	3.84	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	6,887	3.34	1.07
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	6,892	3.85	1.09
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,909	4.15	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,926	3.86	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,924	3.81	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,925	3.34	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,913	3.76	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,920	3.86	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,919	3.90	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,920	3.74	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	6,920	3.84	1.02

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表 15 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	5,488	4.61	0.64
I 2 この授業に積極的に参加した	5,482	3.89	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,483	3.15	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,470	3.00	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	5,439	3.45	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	5,472	2.02	1.08
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,484	3.89	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,483	3.96	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	5,483	3.96	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	5,476	4.00	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	5,472	4.14	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,474	3.82	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	5,452	3.35	1.05
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	5,465	3.96	1.06
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,470	4.22	0.83
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	5,479	3.98	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,479	3.93	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	5,479	3.30	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,477	3.70	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	5,481	3.88	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	5,481	3.93	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	5,480	3.86	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	5,481	3.89	1.03
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	5,424	4.25	0.93
V 2 この授業の受講者数は適切だった	5,422	4.22	0.88
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	5,419	4.26	0.84
V 4 現代心理学部の教育研究設備に満足している	5,416	4.06	0.91

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 6 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	22,504	4.58	0.69
I 2 この授業に積極的に参加した	22,492	3.84	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	22,483	3.06	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	22,452	2.95	1.12
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	22,369	3.48	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	22,454	1.90	1.03
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	22,496	4.00	1.02
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	22,488	3.98	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	22,481	3.94	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	22,455	3.97	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	22,447	3.70	1.17
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	22,435	3.84	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	22,301	3.34	1.09
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	22,396	3.99	1.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	22,413	4.21	0.88
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	22,468	3.88	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22,465	3.77	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	22,459	3.23	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	22,413	3.70	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	22,459	3.92	1.04
IV 2 授業全体の目標が明確だった	22,458	3.91	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	22,451	3.79	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	22,457	3.87	1.05
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	20,585	4.11	1.03
V 2 この授業の受講者数は適切だった	20,492	3.94	1.07
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	20,477	4.12	0.94

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 17 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,130	4.73	0.53
I 2 この授業に積極的に参加した	3,127	4.03	0.89
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,120	3.30	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,123	3.20	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3,107	3.51	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	3,126	2.10	1.00
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,126	4.23	0.92
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,126	4.14	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,124	4.15	0.89
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,123	4.18	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,121	4.22	0.89
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,123	4.11	0.89
II 7 板書のしかたが適切だった	3,107	3.56	1.04
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的 だった	3,095	3.90	1.07
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,116	4.35	0.76
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,124	4.03	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,121	3.99	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,123	3.50	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,119	3.85	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,123	4.18	0.90
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,123	4.12	0.89
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,120	3.87	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	3,120	4.06	0.94

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

6-4 「グループ集計」科目一覧

表18 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期
6	情報処理入門	前期
7	情報処理入門	前期
8	情報処理入門	前期
9	情報処理入門	前期
10	情報処理入門	前期
11	情報処理入門	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	経営学1	前期
2	経営学1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期
13	基礎ゼミナール2	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期
13	基礎ゼミナール2	後期
14	基礎ゼミナール2	後期
15	基礎ゼミナール2	後期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期

表 19 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期
16	基礎演習	前期
17	基礎演習	前期
18	基礎演習	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期
9	BL1	後期
10	BL1	後期

表 2 0 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	前期
2	Cultural Exchange	前期
3	Cultural Exchange	前期
4	Cultural Exchange	前期
5	Cultural Exchange	前期
6	Cultural Exchange	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習2	後期
2	基礎演習2	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期

表 2 1 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	老年学	前期
2	家族社会学	前期
3	ウエルネス福祉論	前期
4	社会福祉発達史1	前期
5	情報処理3	前期
6	障害学入門	前期
7	社会保障論1	前期
8	キリスト教思想1	前期
9	宗教心理学1	前期
10	芸術的人間学	前期
11	グリーフスタディ	前期
12	死生学	前期
13	公衆衛生学	前期
1	リスクマネジメント論	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	地域福祉論	前期
2	精神保健福祉援助技術各論1	前期
3	社会福祉法制	前期
4	家族臨床心理学	前期
5	医学概論	前期
6	精神医学1	前期
7	福祉マネジメント特論2	前期
8	女性福祉論	前期
9	福祉環境論	前期
10	福祉工学	前期
11	精神保健学1	前期
12	精神科リハビリテーション学	前期
13	精神保健福祉論1	前期
14	精神保健福祉論2	前期
15	児童福祉論	前期
16	ソーシャルワーク論	前期
17	権利擁護と成年後見制度	前期
18	ケアマネジメント論	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	医療と福祉特論1	前期
2	福祉とレクリエーション	前期
3	障害者スポーツ論	前期
4	コミュニティ臨床心理特論3	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	家族政策	前期
2	地球コミュニティ論	前期
3	政策学の基礎知識	前期
4	国際経済論	前期
5	地方財政論	前期
6	ライフサイクルの心理学	前期
7	コミュニティ人間形成論	前期
8	世界と宗教	前期
9	エスニシティ論	前期
10	質的リサーチ	前期
11	コミュニティとカウンセリング	前期
12	政策過程論	前期
13	公共哲学	前期
14	住宅政策	前期
15	教育政策	前期
16	自治体政策計画論	前期
17	災害心理学	前期
18	NPO論	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	医療と福祉特論	前期
2	福祉とレクリエーション	前期
3	障害者スポーツ論	前期
4	コンディショニング論	前期
5	小児保健・精神保健	前期
6	メンタルマネジメント	前期
7	スポーツビジネス論	前期
8	バイオメカニクス	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	心理学2	後期
3	社会教育施設論2	後期
4	社会教育計画2	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	情報処理2	後期
2	宗教人間学	後期
3	哲学的人間学	後期
4	社会福祉と法	後期
5	社会調査法	後期
6	人権論	後期
7	生涯スポーツ論	後期
8	高齢者福祉実践論	後期
9	キリスト教社会福祉	後期
10	臨床社会学	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	グループワーク	後期
2	公的扶助論	後期
3	宗教心理学2	後期
4	福祉人間学	後期
5	社会福祉施設経営論	後期
6	福祉マネジメント特論3	後期
7	リハビリテーション心理学	後期
8	リハビリテーション論	後期
9	グループダイナミクス	後期
10	精神保健学2	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	発達障害論	後期
2	障害者福祉論	後期
3	福祉カウンセリング入門	後期
4	障害幼児ソーシャルワーク論	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	統計学入門	後期
2	少子高齢社会論	後期
3	政策科学	後期
4	平和学	後期
5	余暇生活論	後期
6	比較文化心理学	後期
7	障害者スポーツ実践論	後期
8	データ分析法	後期
9	コミュニティ政策特論	後期

グループ11

No.	科目名	学期
1	運動処方論	後期
2	スポーツ科学総論	後期
3	体カトレーニング論	後期
4	アダプテッドスポーツ論	後期
5	コミュニティスポーツ論	後期
6	ウエルネスプロモーション論	後期
7	レクリエーション援助論	後期
8	ウエルネス文化特論	後期
9	スポーツマネジメント論	後期

表 2 2 現代心理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読1	前期
2	心理学文献講読1	前期
3	心理学文献講読1	前期
4	心理学文献講読1	前期
5	心理学文献講読1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	入門演習1	前期
2	入門演習1	前期
3	入門演習1	前期
4	入門演習1	前期
5	入門演習1	前期
6	入門演習1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	統計法2	後期
2	統計法2	後期

グループ5

No.	科目名	学期
1	心理学文献講読2	後期
2	心理学文献講読2	後期
3	心理学文献講読2	後期
4	心理学文献講読2	後期
5	心理学文献講読2	後期
6	心理学文献講読2	後期

グループ6

No.	科目名	学期
1	入門演習2	後期
2	入門演習2	後期
3	入門演習2	後期
4	入門演習2	後期
5	入門演習2	後期
6	入門演習2	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法1	前期
3	統計法2	後期
4	統計法2	後期

教育調査の検討グループ（2011年10月現在）

座長 事務局	西原 廉太	（副総長、文学部）
	山口 和範	（経営学部長）
	東條 吉純	（教務部副部長、法学部）
	松本 康	（社会学部）
	塚本 伸一	（現代心理学部）
	石田 和彦	（企画部企画課）
	今田 晶子	（大学教育開発・支援センター）
	伊藤 直子	（大学教育開発・支援センター）
	上原 裕輔	（大学教育開発・支援センター）

2010年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	東條 吉純	（教務部副部長、法学部）
事務局	今田 晶子	（大学教育開発・支援センター）
	伊藤 直子	（大学教育開発・支援センター）
	間中 賢治	（教務事務センター）
	増田 絵里子	（新座キャンパス事務部教務課）

2010年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2011年10月発行

編集 立教大学 2010年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 株式会社 プリントボーイ

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6-24-13

TEL 03-3309-1861 FAX 03-5315-3414

